

作り、之によつて身を飾り贅澤を盡す事に成つて居る。されば、印度の貴婦人は一見したところ寶石屋の看板では無からうかと疑はるゝ如き姿のもので、髪飾り頸飾り、腕には腕輪、指には指輪、耳には耳輪を纏ひ、殊にタミール種族の貴夫人などになれば鼻にまで孔を穿けて黄金の鼻輪をぶら下げると、全身悉く是れ金銀寶玉、環珞の網に覆はれて居ると謂つてもよい位である。けれども此處に注意せねばならぬことは、觀世音菩薩であるとか、或は普賢菩薩であるとか文殊菩薩であるとかの御姿は總て女に近い形態に描かれ、身に環珞を着けて居られるものであるが、其の環珞は滿徳の莊嚴を象徴したもので、必ずしも金銀寶玉の環珞では無いのである。

女もし觀世音菩薩の如き大悲大慈の心情に至れば、環珞を以て其身を飾る印度の貴婦人の如く、滿徳を以て我身を莊嚴し、あらゆる尊貴を一身に集めた塊となり得られるであらう。大悲とは如何なる意かと申すに、これは人の身に振りかゝる火難、水難、羅刹難、刀杖難、鬼難、枷鎖難、冤賊難など種々の難苦を抜いてやる事で、大悲とは是等の苦みに代るべき樂

みを與へて遣る事である、畢竟するに拔苦與樂が是れ即ち大悲大慈である。女に何が大切だと申しても、一念菩提心を發起して大悲大慈の心情を身に體し、拔苦與樂の實を擧ぐるほど大切な事は無いのである。此の心情になつて初めて女も迷はずして自由自在のものとなり、毫も窮屈を感じぬ解脱の境涯に入り、觀世音菩薩に等しき神通力を得られるやうになるのである。

四 拔苦與樂なれ

觀世音菩薩は、單に自身の御身を滿徳徵象たる環珞を以て莊嚴したのみで満足せられず、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五には、無盡意菩薩の捧げられたる環珞を受け給ふや、直ちに之を二分して其一分を釋迦牟尼佛に奉り、残りの一分を多寶佛塔に奉つたとある。釋迦牟尼佛と多寶佛塔との二つを一つに總括めて約めて謂へば、つまりは心一つの事である。大悲大慈の心情も、之を心に奉り得ず、心が大悲大慈の心情に追ひ使はれ、我には大悲大

悲の心情があるぞと云はぬばかりに、満徳の瓔珞を以て身を飾り、莊嚴を誇りとして居る間は、決して觀世音菩薩の如き神通力を得て、光風霽月の解脱境に入り得られるものではない。古へより「聖人は世と共に推移る」との語があるが、大悲大慈の心情に迫り廻はされずして大悲大慈の心あり、能く拔苦與樂の實を擧げて、苦難に充ちた娑婆世界を濟度するやうになるのが、即ち世と共に推移る聖人の心理状態である、是が即ち「正覺」と申すものである、同じ一つの露の滴りでも、それが燃ゆる如き秋の楓葉の上に落つれば、朱を欺く紅玉の如くなり、春の萌え出づる柳の葉の上に落つれば、緑なす瑠璃の碧玉の如くなるものである。露の玉には些の汚穢なく、透明にして清淨であるからである。女の心にも若し我見なく氣隨我儘さへ無かつたならば、不潔は之に寄り付く事が出来ないで、如何なる對象にも同情同化し得る神通力を得、遊戯三昧のうちに毫も苦しむ事なく、小兒の遊び戯るゝが如くにして拔苦與樂の實を擧げ、大悲大慈を身に體して、満徳莊嚴の瓔珞を心に飾り得らるゝやうになるものである。

本能の發作や一時の衝動に因つて、氣隨氣儘の行動を取てし、斯く行動する事を、主義によつて進退するかの如く心得違ひして居る女には、決して眞の自由は無いものである。三百理窟を捏ねあげて、辯解したり辯證したりせねばならぬ處に、無限の苦痛があるではないか。言明し得ざる不自由があるではないか。狭い窮屈なところがあるではないか。自分が先づ苦より脱して樂み能はざる境涯にありながら、如何して斯る氣隨氣儘の行動を取てする事に依つて、娑婆世界の苦を抜き之に樂みを與へ得られようか。これ明かに是等の女が遊戯三昧に入つて居らぬ證據ではないか。

古來、禍は兎角閨門より發するものと稱せらる。釋迦、孔子、耶蘇、マホメット等が、女に對して恰かも、好意を持たぬかの如き教訓を風々發せられて居るのは、女には稍々もすれば我儘氣儘に出づる我見を主義の如くに心得違ひし、人倫を破る行爲を取てする傾向があるからの事である。若い女達は須らく本能の發作、或は一時の衝動を主義と混同したる我見の妄説に迷はされぬやう、よく注意せねばならぬ。

五 信仰を異にする夫婦

耶蘇教の廣く行はるゝ泰西の諸國や、又回々教を信奉する國などには、夫婦が其の信仰を異にする爲め、それが男女の愛情にまでも影響して、夫婦仲が面白く進行せず、遂に夫婦別れをせねばならぬやうになる例を、往々にして見受けるが、幸にも我が日本には、斯る例が甚だ尠いのである。

近頃傳へ聞くところによれば、米國加州イグナチウス大學教授のウード氏は、歐洲戦争に關し妻と其の意見を異にし、教授が聯合軍の同情者なるに拘らず、妻は獨逸國に同情を寄せ、始終兩人の間に争論が絶えぬので、同教授は遂に其妻を置き去りにして、何れへか姿を隠してしまつたとの事である。戦争に關する如き些々たる問題に就てすら、夫婦の意見に間隔を生ずれば、斯る悲惨の結果をさへ見るものである。況んや人生的生活の根本ともなるべき宗教上の信仰が夫婦の間に相異るところがあれば、感情の圓滿なる融合を缺くに至るのは當

然である。されば婚約を結ばうとする男女は豫め配偶者の宗旨を取調べて置く事は、最も大切の事であらうかと思ふのである。

然し日本では現に婚約を整へるに際しても、配偶者の宗教などを餘り考慮のうちに置かぬに拘らず、夫婦各その宗教を異にする事によつて、衝突を來す如き愛ひの減多に無いのは、由來本邦は多神教國で、國民の大多數は八百萬の神々を信じ、我が信する神以外に神無しと言ひ張る如き頑固な國民性を馴致せず耶蘇教の説くエホバの神も、佛教の説く佛も、回々教の説くアラアの神も、或は婆羅門教の説く梵天帝釋も、皆之を八百萬の神々のうちの一つであると思ふし、強ひて之を排斥し若しくは否定する必要を認めぬからであつて、決して日本民族が宗教に冷淡なるの致す處では無いと思ふ。

六 佛教の根本思想

古來我が國は多神教國である。又我が國民性の然らしむるものか、宗教の相違が日本に於

て夫婦乃至は親子の交情を割くほどの激しい争ひにならぬのは、佛教が今日に至るも猶ほ依然として國民大多數の宗教たるの致す處である。

佛教の根本教旨は萬有神教である。宇宙萬有悉く是れ神で、我が萬有との間には勿論差別をつけず、森羅萬象擧げて是れ神なりとするところに佛教の眞諦がある。固陋なる一派の耶蘇教神學者によつて主張せらるゝ如く、唯一神を以て總ての人に臨み、我が佛尊しとのみするものではない。随つて佛教の教徒は信教に就て孰れも寛容の精神がある。如何なる宗教の神でも佛でも、皆な之を受け容れて我が神、我が佛とする事の出来るものは實に佛教である。異宗の信者を視るに仇敵を以てする如きは、佛教の根本教旨の上より到底爲し得ざる處のものである。佛教が支那に於て儒教を包容し、遂に王陽明の如きを出し、又日本に傳へらるゝや、在來の神道と調和して本地垂迹の説となり、今や更に耶蘇教とも衝突せずして却て日本の耶蘇教を佛教化するに至つたのは、畢竟するに佛教の根本教旨が萬有神教で、森羅萬象を是れ神なりとし、あらゆる宗教を包容する寛容の氣分に富んで居るからの事である。

佛教は素より萬有神教であるが、萬有神は人の内的生活に於て統一せらるれば茲に大化して唯一神となるものである。かく心的内生活に於て統一せられて唯一神となつた萬有神は、之を大乘起信論などでは「總概萬有神」と稱んで居る。されば、佛教は萬有神教であると同時に又、唯一神教であるとも謂ひ得られる。唯一神教としての佛教の立場より觀察すれば、三千世界一念の中にありて、伊太利の耶蘇教僧侶ギオダルー・ブルーノ（四九一五）が曾つて考へたやうに、萬有を唯一神の權化であり分身であるとも考へ得られるのである。

佛教は斯くの如くにして、萬有神教であると同時に唯一神教である。唯一神教であると同時に又萬有神教であるから、夫婦の一方が佛教徒である限り日本に於ては、夫婦が信教を異なる一事によつて衝突をし、夫婦別れをせねばならぬ場合に立ち到る事は萬々無いものと見て差支無いのである。

七 信仰上の排他主義

耶蘇教を信する泰西の諸國や、回々教を信する國などで、夫婦各其の信教を異にするのが原因になつて争ひを生ずるに至るのは、耶蘇教でも回々教でも、共に極端なる唯一神教で、耶蘇教の經典には、其神を「嫉む神」なりとし「我の外神ありとすべからず」と教へ、回々教の神も亦甚だしい排他的のもので、哈勒經は、アラ一の外に神無しと教へるからの事である。佛敎の根本教旨は斯の點に於て、耶蘇教、回々教等の如き唯一神教と全く其の趣を異にする。唯一神を固く信仰すれば、勢ひ如何しても信教上の排他的傾向を生じ、惹いて親子夫婦の愛情までが之によつて割かれねばならぬことにもなる。

日本に於て、信教を異にする爲め、夫婦の間に感情の離反乃至衝突を生ぜぬのは、由來日本が多神敎國であると共に、佛敎が國民大多數の宗敎であるのにも因るが、其他に猶ほ一大原因がある。即ち、祖先崇拜が日本の民族氣質になつてゐる事が其れである。

祖先崇拜は又決して日本國民大多數の宗敎たる佛敎と衝突するもので無い。泰西の宗敎史家なぞによつて論究せられて居る祖先崇拜は、宗敎として或は大なる價値の無いものである

かも知れぬが、日本民族の間に行はるゝ祖先崇拜は、泰西宗敎史家によつて取扱はるゝ祖先崇拜とは全く根本よりの性質を異にするもので自我の發展が是れ日本民族の祖先崇拜である。佛敎が日本の祖先崇拜と衝突せぬ所以は實に茲に在る。佛敎は元來内界と外界との間に差別を設けず人と神との間にも區別を設けぬもの故、祖先を以て小我の發展せる大我なりと見做し、祖先を我が神、我が佛なりとして崇むるを得るのである。

八 祖先崇拜に一致せる國體

日本今日の文物は、皆外國より輸入せられたるもので、日本固有のものは殆んど一つも無い。文學も哲學も外國から輸入せられたもので、儒敎も佛敎も美術も又科學工業も皆其の始めは外國から輸入せられたものである。此の間に於て、外國から輸入せられず、日本固有のものとして世界に誇るに足るものは、ただ萬世一系の天皇制と祖先崇拜あるのみである。

國民魂は單に日本のみならず、何れの國民にもあるが、日本の大和魂と他の諸國の國民

魂と異なるところは、大和魂は祖先崇拜の變形したもので、自我を發展して之を大我とし、宇宙萬有と一にならんとする意氣を存する點にある。日本國民は今日の如く民族に膨脹的傾向を存するのは、一に祖先崇拜の賜で其れが大和魂といふ名になつて顯れて居るのである。日本民族に祖先崇拜の國風が全く無くなつてしまへば、日本人は今日の如き強さを維持し得られず、必ずや弱くなつてしまふに極つたものである。勿論、大和魂も消えてしまふに至るは必然である。日本民族は如何なる時代に遭遇しても永遠に祖先崇拜の國風を廢すべきでない。この祖先崇拜の國風は、又異宗教を調和して之を統一する坩堝になるのである。

實際の事實としては、夫婦の一方が佛教徒で他の一方が耶蘇教徒である間柄よりも同じ佛教徒でありながら、一方が眞宗の門徒で、他の一方が日蓮宗の信者である場合に、却て衝突が起り易いものである。これは何れも唯一主義で、眞宗の門徒は一向一心彌陀如來一點張りで他に臨まうとし、日蓮宗の信者は又法華經一卷で一切世間に當らうとするからである。然しそれとても日本民族固有の國風たる祖先崇拜によつて調和統一せられ得るものである。依

つて、信教を異にする夫婦も、日本民族固有の國風たる祖先崇拜に歸一し、この國俗に遵據してさへ居れば、決して感情の衝突を來すが如き憂なく、如何に異なる宗旨を信じても互に寛容し、一家は波風立たぬ圓滿の幸福を享有し得らるゝものである。

葬式の如きも、本來から謂へば、喪主の信教如何に拘らず、故人の信教に附帶することによつて執行するのが至當であらうが、日本の如く祖先崇拜を國風とする民族にあつては、祖先の信徒に伴ふ儀式によつて葬式を執行するの亦、不可く無からうと思ふ。要するに眞に覺醒せよ新らしき女は、一時の衝動でなく、前述の如く宗教的信念を以て、自己の立脚地とせねばならぬのである。

人生と宗教

一 樂觀と悲觀

吾人が人生を眺めるのに二つの見方がある、一つは樂觀と言つて此の世の中を面白いものである、と眺める、一つは悲觀と言つて此の世の中を果敢ないもの味氣ないものと見るのである。古歌にも

月見れば千々に物こそ悲しけれ

我が身一つの秋にはあらねど

皎々として大空に輝いて居る月にあつては、元より嬉しいとも悲しいとも思つて居らぬが、眺める方が、世の中を果敢なむ心を持つて居る月に對すると、此の歌の心の様に、月見れば千々にものこそ悲しけれといふ感が起る。例へば旅に居て故郷に残し置いた両親とか妻子とかの事を考へて居ると、月を見ても花を見ても悲しみを増し涙を催す種となる。又一方の此の世を樂觀する人から眺めると、古人の歌つて居る通り、

此の世をば我世とぞおもふ望月の

缺けたることもなしと思へば

といふ様に觀らるゝのである。同じ月でありながら一人は之を悲しと眺め、一人は之を樂しと見る。乃ち一つの月を二つに見る。併しながら之を眞理の上から言ふと、たゞ之を悲しいものとはかり見たのも本當の月を觀たのではなく、又一圖に嬉しいとのみ眺めたのも決して月の本體を眺めたといふ譯ではない。月の本體にあつては悲しいとか嬉しいとかいふ事を超越して居るので、茲に面白い意味が含まれてある。

二 常人の通有性

然し之は稍哲學的方面の話になつて、通俗的でなくなるから其は他日の事として、さて解り易く言ふと、悲觀する人は何うかと言へば月の本體は知つて居らぬが、其の人自身には悲觀す可き理由を持つて居る。凡て人々には慾望といふものがある、此の慾といふものは必ずしも罪と名づくべきものではない、何故なれば之を善用すれば意志の力となるので、悪用するから強慾とか貪慾とかいふ大に忌むべき心の状態を呈するのである。

今少し委しく言ふと、我々は知識慾、生存慾といふものを持つて居る。之は何人でも自ら省みて一寸考へると直に分る事で、例へば幼児などが、追々智慧づくに隨うて、見るもの聽くものに就て其の名を尋ねる。次に其の由来を尋ねる、今度は其の意味を知りたがる。かういふ順序で人も初めは普通の事物を知り得るを以つて満足して居るが、段々知識が進んで來るに隨うて之を學問的に知りたくなる。それで得心が出来なくなると次に哲學的に知りたくなる。それでも安心が出来ぬとなると今度は徐々宗教界に這入つて來る。

次には名利慾がある、此の慾望の事は前にも述べたけれども、一言更に附加へれば、人間が知識だ學問だといつて叫んで居るが、其の大部分を解剖して見ると自分の名譽を得たい爲め自分の利益を得ようとする爲めといふ事になる、口では立派に天下國家のためだとか社會民衆の爲めだとか云つて道德者らしい事を言つて居ても、其の腹の中を割つて見ると自分の名譽の爲め自分の利益の爲めである。要するに人は誰でも飲まず食はずに學問する事も働く事も出来ぬといふ事が事實である以上、此の名利慾はすべての人の通有性とも見るべき慾望である。

三八 芸の世界

次に生存慾之は死にともない永らへたいといふ慾望で、若し生命に代るものがあるならば、金錢も入らぬ名譽も入らぬ、如何なるものに換へても生命だけは永らへたいといふのは、是亦人間の通有性とも言ふべき慾望である、或る立派な人士が臨終に辭世の句を吐いて「あら死にともなく」と叫んだといふのは頗る面白い事と考へられる。

さて人間には此の三つの大なる慾望があるが、果して其は満足され得るものであらうか。是はよほど能く考へて見ねばならぬ事である。欲しい／＼と思つても却々さう思ふ通りに行くものではない。乃で此の慾望が達せられない遂げられないとなると、其が限りなき苦痛である。釋尊は之を人生の四苦八苦と教へられた。此の四苦八苦の事は今までも既に屢々説いた通りで、生の苦、老の苦、病の苦、死の苦、之を四苦といひ、此の四苦に可愛い者にも

離れねばならぬ、といふ哀別離苦、氣の合はぬ者とも同居せねばならぬといふ怨憎會苦、思ひ求める事が遂げられぬといふ求不得苦、氣になり心配になつてならぬといふ憂悲惱苦、此の四を加へて人世の八苦といふのである。

四 神に祈れ佛を念ぜよ

乃ち此の世の中を悲観する方からいふと斯くも世の中は不満足に出来て居る。思ふ通りにならぬ世の中である、儘ならぬ世の中である。苦しい悲しい詰らぬといふ考へが晝夜我が心を攻める。此に至つて始めて宗教的精神といふ者が起つて来るのである。

其の宗教的精神といふのは、其こそ永久的精神である。時間空間を貫いた處の大精神である。之を哲學的に言ふとむづかしいが、たゞ一口に平易に言ふと、

「神に祈れ！佛を念ぜよ！」

といふのである、敢て佛でなくてはならぬとか佛教でなくてはならぬとか、左様な窮筋な事

ではないのである、我國の英雄豪傑の傳記を読んで見ても、亦外國の優れた人の傳を読んで見ても、あゝ神よ我を助けよ、といふ様な言葉が到る處に見受けられる、助けよ所ではまだ本當の所ではない。あゝ神よ！と渾然同化して終つて居るのが本當である。眞宗信者は南無阿彌陀佛で安心して死んで行く。加藤清正の如きは七字の題目を聯隊旗の如く押し立て、千軍万馬の間を無人の境の如く進んで行く。徳川家康の如きも南無阿彌陀佛を一月に八萬遍づつ唱へられたといふ事である。

五 臨終の稱名

念佛にせよ、題目にせよ、アーメンにせよ、死んで行く時の氣休めに唱へるのではない。平生一切の行爲、一切の仕事の原動力が是から働き出すのでなければならぬ。是が宗教心の力の偉大なる所である。人間は生れてから死ぬまでの間、此の宗教心といふ偉大なる信念が無くては、とても大事を遂行する事は出来ぬ。西洋では斯ういふ堅い信念を持つて居る人は、

何か一事を企て一理を發明するに就ても一生涯外目をふらずに進んで行く。そして已れ一代で出来ねば子の代で遂げさせ、子の代に出来ねば孫の代までも己の企てを繼續させて行く、平和の時に於ける此の精神が、國家多難の時に際して發現すると、七たび死して七たび生じて賤を討滅するといふ大精神となるのである。

六 死して亡びざる信念

此の大精神此の大信念は吾人が生れながらに具へて居る所のものである。他から借りて來るものでもなければ殊更に教へられたものでもない。此の大精神此の大信念の上に立つて人生を眺めるといふと、今まで味氣ない果敢ないと思つて居た世の中も大變面白い世の中と變つて來る、何故なれば、かういふ堅固な信念があつて世に立つと、自分のした仕事は千萬年の末までも活きて傳はる。言ひ換へると自分といふものが永世不滅といふ事になる。例へば茲に釋迦なら釋迦といふものを觀念すると、其の釋迦の面目釋迦の精神が歴然として茲に存

して居る。年代から言うても三千年も昔の事であつて釋迦の形骸は已に死して居るが、其の深き教示厚き感化といふ様なものは實に千古不滅である。又楠公の如きも左様である。我々が一度忠といふ事に思ひ及ぶと、直ちに正成公の活面目大精神が儼として生きて存在して居るのを感じるのである。乃ち正成公は淡川で討死したが、忠といふ字の上に永久の生を保つて居るといふ事になる。

七 安心立命せよ

要するに世の中の悲觀樂觀は尙一つの枝葉の觀念に過ぎぬ。悲觀樂觀を超越した所、其處に永久不變の大道といふものが存在して居る。譬へば茲に朝顔といふ一つの植物があつて朝に咲いて晝頃には早萎れて終ふ。之を眺めて實に朝顔は壽命の短いものであるといふが、さて翻つて其の朝顔の本體からいふと六七月頃から咲き初めて秋の末まで咲いて居る、花の一部分を見ると朝咲いて晝しぼむ短い壽命の花も總體から見ると半年近い永い壽命と見る事が

出来る。更に一層深く考へると、其の朝顔の種は去年も一昨年も其の前年も其の前々年も數
 十百千年間連続綿相續して芽を出し花咲き實を結んで永久に存在して居る、決して果敢ないも
 のでも味氣ないものでもないといふ事が分る。それと同じく人生といふものも形體の上から
 見ると極めて短かい壽命の者の様であるが、其の本體から眺めると無始無終である、此の本
 體即ち大精神を人格化したのが即ち神であり佛である。此の大精神を手に入れると我々は生
 死といふ事と相關はらぬといふ大安心が出来る境致に達するのである。

前述の如く、此の大精神大信念を手に入れて其の上に立つて居れば、前途洋々として春の
 海の如く愉快な希望が次へ／＼と生じて来る。乃ち日々夜々神に謝し佛に謝して悦びに満ち
 たる心を持つて世に處する事が出来る。此頃の流行語の所謂「意義ある生活を營む」ことが
 出来る、即ち小なる悲觀樂觀を超越して大なる眞の樂觀の上に安住する事となるのである。

精神的生活

一 人間の價値

一國の太子として生れさせられたる我が大連釋尊は、その外的物質的生活に於て何等意に
 満たざるものとはなかつた。然るに釋尊は聽て昇るべき國王の位も、最愛の妻子をも打捨
 て、顧みず、急轉直下、直ちに只一個の乞食沙門と身を下して道を求められた。是は何が故
 であらうか。云ふまでも無く只この一事、即ち生死の大問題を解決せんが爲めである。素よ
 り外的物質的に於て缺くる所があつては吾々は生存する事が出来ない。物質的生活の資料決
 して輕視すべきものでないが、然し又吾々は之に満足して内的精神的方面を閑却してはなら
 ぬ。若し外的物質的だけで満足だと云ふ人があつたなら、納は其人に對して「お前の生活は
 程度の差こそあれ牛馬禽獸に等しい」と斷言するに憚らない。人間は自ら萬物の靈長だと云

つて居るが、これは人間自身が勝手に云ふ事で、牛や馬は又各自決して他の何物にも劣らな
 いと思つて居るかも知れない。物質的生活だけならば、彼等禽獣でも之をなして居る、敢て
 禽獣に限らず總ての生物、總ての無生物、皆之をなして居る、春の花も秋の紅葉も彼處に繁
 れる庭木も、如何に微細の塵一本と雖も各々之をなして居るではないか。果して然らば吾々
 が如何に萬物の靈長だと力味んで居ても、吾等の生活と彼等の生活と、其處に何の選ぶ所が
 あるか。吾等の生活が彼等の生活に比してどれだけの價値と意義とがあるであらうか、それ
 は人間として全く價値なき意義なき生活ではあるまいか。然らば眞に價値あり意義ある生活
 とは如何なるものであるか、云ふ迄も無く内的生活である、精神的生活である。

二 精神的生活

精神的生活と云へば、一切世間の煩累を避けて、山の中にでも引込んで何等世に益する所
 もなく只心靜かに其の一生を終はる事であると考へて居るものが尠くないやうであるが、こ

れは却つて精神的生活とは相反するもので、實に無意義極まる生活と云はねばならぬ。眞の
 精神的生活、眞の意義ある生活とは決してソンのものではない。看よ、釋尊は老病生死の四
 苦——約すれば生死の二——に深き憂ひを感じるや、奮然として家を出で苦行六年の十二月
 八日の曉の明星と共に眞に意義ある生活を認めらるゝや、再び世俗の中に歸りて東奔西走
 縦説横説三百餘會の説法に席温まる暇はなかつたではないか。世界は生住異滅、人にあつて
 は生老病死の四に依つて、時々刻々に流轉變化して居る、朝の紅顔は夕の白骨で、如露亦如
 電あはれ果敢なきが此の世の常態である。此の短い人生に處して、限り無き命を得、轉變極
 り無き世に處して、寂然不動の地を見出し、何の苦みも何の悶えも無く、常に歡喜に充ち勇
 氣に充ちたる精神を以て、自己の踐むべき道を踐み、行ふべき事を行ひ、勤むべき事を勤め
 て俗事に奔走する、其處に精神的の生活が顯れ、生活の眞の意義を味ふ事が出来るのではあ
 るまいか。

三 吾人の生命

元來生とは何を意味するか、吾人の生命これ即ち生である。然らば吾人の生命とは何であるか。云ふ迄も無く母の胎内を出で、始めて此世の光に浴した時が其の始めて、棺の蓋を被つた時が其の終であるとは一般世俗の見解である。が然し衲共は、そんな果敢ない生命を以て生命とする事は出来ぬ。我佛敎の教ふる所に依れば、吾々の生命は無限であり無窮である。無始劫來より盡未來際かけて永久不斷に相續する。即ち無始無終を通じて一以て之を貫き、千態萬狀の中に於て自己を認むる。これが即ち吾人の生命である。吾々が終日働き疲れて夜寝る、翌朝勇氣を盛返して又働く又寝る又働く、此くの如く負けず劣らず各々活動する、これが即ち生命の力である。此くの如く觀察すれば、全世界は總べて生命の變態である。山の巖々として聳えて居るも、海の洋々として湛えて居るも、庭石の死せるが如く並んで居るも、それが其儘自己の生命を營まんが爲めに從晝至夜間斷なく努力して居るのである。して見れ

四 漸源と道吾

ば世界宇宙は秩序あり統一あり、而かも網の目の如く、環の周りの如く、其の始めの極處を見出し能はざると共に、終の極處も見出し能はざる、一の大生命なる連續である。吾々人間は其の大生命の一部分として、今茲に此の如き相をなして現はれて居るものである。故に是れが生で是れが死だと云ふものは決して無い。生死は全く一如である。之を生と云へば生でもよければ、之を死と云へば死でもよい、生と云つた場合には生一つあつて死はない、死と云つた場合には死一つあつて生はない。如何なる宗教、如何なる哲學も、この端的を確かりと體得して置かねば、眞の大安心は得られるものではない。

今之を確むる爲め茲に一例を擧ぐれば、昔漸源と云ふ人が其師道吾に隨つて、或處の葬式に行つた際、棺を叩いて「生か死か」と問うた、道吾は「生とも道はず、死とも亦道はず」と答へたので、「漸源は什麼としてか道はざる」と云ふと、道吾は只「道はず道はず」と云つ

た。生とか死とか云へば好肉上に瘡を生ずるのである。漸源には之が何うしても分らぬ、然し其場は其れで済まし、歸る途中で漸源は何うしても道はせやうと氣を苛立て、「道はずば和尚を打し去らん」と云つたが道吾は「打つ事は即ち打つに任かす、道ふ事は即ち道はず」何とでもせい、何かあるものを殊更に道はぬのではないと、一向に道はぬ、そこで漸源は遂に師匠の頭をボカリとやつた、けれども何うしても言はない。其後石霜の處に行つて、道吾との問答を繰返して尋ねたが、矢張り石霜の答へも道吾の答へと同じく「生とも道はず、死とも亦道はず」とあつたので「什麼としてか道はざる」と云ふと之れ亦「道はず道はず」と答へた、之を聽いて漸源は始めて大悟したと云ふ事である。また關山國師の處へ「生死事大無常迅速何時死ぬか分らぬので、何卒か教へを請ひたい」と云つて或僧が來た。すると「國師は「惠文の處に生死の沙汰があるものか」と一喝を下すと共に、打つて「打ちのめして、とう／＼追出して仕舞つたと云ふ事があるが、此僧で氣が付いたであらう。

五 冷暖自知せよ

諸子目玉ばかりバチ／＼させて、死ぬる事を考へて居ては駄目である。生れたからと別に何か出て來たのではない、死んだからとて今迄あつたものが無くなつたのでも無い。生死は唯瞬間の閃きに過ぎない。例へば電光がピカツと光つた様なもので、何を無くしたのでもなければ、何を止めたのでもない。吾々は腹の中に種々様々な煩惱妄想を詰め込んで居るから、忙がしい此の世の中に在つて、人生五十だとか六十だとか、甚だしきは夜半に嵐の吹かぬものかはなど取越苦勞をして居る。力の續かん限り働いてさうして死ねばそれで本望である、何も考へる必要はない。如何に病氣に苦しみながらも、如何に自由を奪はれて居ても、ただ自己の活動を續けてさへ居れば、それは大自由であり大安心である。元來生とか死とか考ふべき理由も考ふべき事も存しないのである。然し斯やうに生死は無いぞ／＼と幾ら抑へ付けて居ても、下から／＼と生死が頭を持上げて來る、生死が無いと云ふのは理窟では無い。

水を飲んで冷暖自知するが如く、大徹大悟自ら其境涯に至らねばならぬ。大徹大悟と云つても漸源や、關山國師の場合のみに限らない。淨土門ならば他力的に南無阿彌陀佛々々々々と、法華宗なれば妙力的に南無妙法蓮華經々々々々と、没頭して仕舞つた時、何處に生があり何處に死があるか、共に一行三昧である。

六 手枕一睡の夢

茲に至れば生とか死とか目にチラ付くものは一つも無い。生が往途ならば死は還り途である、前に擧げた道元禪師の語を假りて云へば「生死往來雲の變更」で生滅常なき浮雲の如く、何等胸中に生死の滯るものが無い。「迷途覺路夢中に行く」で、相對的に考ふれば、迷ひも悟りも生死も涅槃もあるが、皆手枕一睡の夢に過ぎない。醒め來れば何物も存するものはない。然らば斯くの如く生死を超越して了つた境涯は何んなものであるか。「只一事を止めて醒めて猶記す」茲に唯一つ面白い事がある。それは「深草の閑居夜雨の聲」物靜かなる深草の山寺

に、沈々と更け渡れる眞夜中頃、雨垂の音がポトリ／＼と落ちて居る、そこに生があるか死があるか、雨垂の音を聞け、雨垂の音を聞け、諸子此の生死の大問題さへ解決が付けば世間一切の事、過去を追懐して悲しむべき事も無く、未來を思うて憂ふべき事も無く、現在の苦しみに悶ふる事も無い。常に平和に安穩に活潑々々の活動を續けて行く事が出来る、これが眞に意義ある生活ではあるまいか。

自性徹見の妙味

一 此性如何が徹見せん

「兜率悅和尚三關を設けて學者に問うて曰く、撥草參玄は唯見性を圖る、即今上人の性何處に在りや。自性を識得すれば方に生死を脱す、眼光落地の時什麼生か脱せん、生死を脱得すれば去處を知る、四大分離して何の處に向つてか去る」とは是れ兜率三關の公案である

が、我が禪門に入らんと欲する者は先づ第一に見性をせねばならぬ。

性とは人間の本性本體にして古今東西に通じて不改の物である。野にも一杯、山にも一杯あらざる處は無い、前方にあるかと看れば忽焉として後方にある。されば什麼にして此の性を捉へ得らるゝか。衲がこゝに拂子を握つて居るやうに、茶碗を捧ぐるやうに、什麼にして性を捉へ得らるゝか。金剛經に過去心も現在心も未來心も不可得なりとあれど、其の不可得の心をドラ焼餅を取つて喰ふ如く什麼して手に取る事が出来るか。彼のコロンブスが亞米利加新大陸を発見せしも、ワットが蒸汽力を発見せしも、元は微なる一念の作用なる如く、即今上人の性を其の微なる一念の作用に由つて什麼にして発見するか。臨濟大師は「こゝに說法底、そこに聽法底これなり」と言つて居られるが、さて何處に性が在るか。柱の中か襖の外か天井の裏か疊の下か袖の内か懐中か、性は果して何處に在りや天機洩すべからず、これ以上は各自それ／＼が百圓の金貨や金剛石の指環を遺失せし時の通り、大探しに探し當ねばならぬのである。

幸ひにして此の性、横に十方に互り豎に三世を極むる性を探し當てしならんには、何人と雖もこゝに坐し乍ら淀川の白帆船を止め、十萬億土の佛を持ち來り、木曾川の水をグット一口に呑み盡す所の自由自在遊戯三昧を得る事が出来る。併し局に當る者は迷ふ「君は深野のきり／＼す聲はすれども姿は見えず」で、容易に此の上人の性は捉へ得られないのである。自分の眼玉を以て自分の眼玉を見得るやうになるにあらざるよりは、それ青疊、それ緋毛氈と言つたやうにテツキリハツキリ此の上人の性は捉へ得られないのである。

二 到處即禪道三昧

それ東洋の宗教たる佛教、殊に大乘的佛教——衲は特に大乘的佛教と言ふ——の粹は禪であつて、禪はあらゆる佛教を通じて存し、禪無きは佛教にあらずと謂つても好いのである。例へば日蓮宗の南無妙法蓮華經の題目、眞宗の南無阿彌陀佛の念佛、皆これ禪三昧に外ならぬのである。否禪はあらゆる佛教のみでなく、我々が日常の治生産業の上にも存して居る、

豆腐屋が豆腐、炭團屋が炭團を作る上にも存して居る。古歌に「佛法は障子の引手峰の松火打袋に鶯の聲」と歌うてあるが、禪はガラリと開ける障子の引手にも、千年の翠を呈する峰の松にも、カチリと打つ燧石にも、ホ、ホケキヨと轉る鶯の聲にも存するので、彼の世の學者が佛教を信する者を目して有難屋など、御丁寧に屋號までも付けて之を冷笑し、又坐禪などをする者を目して枯木寒巖の如き一向國家社會の爲めに活動せぬ所の仙人のやうに想像して居るのは、これ驢鞍橋を認めて老爺の下領とするよりも亦甚だしい誤解である。要するに禪は人間學、社會學、政治學、經濟學等一切の學問の原理を教ふるもので、引くるめて言ふ時は實際社會の眼前口頭此儘が禪である。而して禪を代表したる解り易い言葉を求むると主人公と云ふ話である。此の主人公は日本國民として云ふ時は畏れ多いけれども萬々歳の聖躬を指さすのであるが、禪道の上より云へば佛性である、真空妙有である。この真空妙有は大乘的佛教の粹である。語を換へて言へば「差別無きの平等は惡平等、平等無きの差別は惡差別なり」と惠心僧都の道破せられた通りで、真空は妙有、妙有は真空の此の不離不

即の處が、禪のいふべからざる絶妙好辭の扇要である。されば禪は帝國主義のやうな處、個人主義のやうな處、本能主義のやうな處、自然主義のやうな處など、色々の形を備へては居るが、廬山の眞面目は八面玲瓏、真空にして妙有、妙有にして真空なるが則ち禪である。彼のルソーの佛國革命思想の如き、これ差別無きの惡平等、無政府主義の如きも亦差別無きの惡平等で、真空妙有、妙有真空の賊である。彼等は自由平等の天地は、あらゆる一切の階級を破壊したる後でなければ到來せぬかのやう唱へて居るが、高所は高平、低所は低平で、人間到るところ自由平等の天地を見出す事が出来るのである。「春江潮水連海平、海中明月共潮生」である。

四 聖德太子の見地

神や人の始めを教へ、儒や人の中を教へ、佛や人の終を教ふ。聖德太子豊聰にして此の神儒佛を鼎足の如く用ひ、以て政治を執られしは千古の達識である。始めとは天祖父子君臣の

神訓、中とは仁義禮智信の五常、終とは生死の問題を指すのであるが、斯く神儒佛各々特色あり、櫻の花を柳の枝に咲かせて梅の香ひを持たす事は素より難しと雖も、櫻や柳や梅や、其の植物たるに於ては同一である。聖徳太子は夙に彼の銀椀裏に雪を盛り、白馬蘆花に入るの大見識を以て三教を合同し、之を政の上に施さんとせられたのである。三教相扶けて道徳の大樹を成し、葉生じ、花笑ひ、蝶舞ひ、鳥歌ふの治國平天下を致さんとせられたのである。政は學にあざれば至らず、政治には學問道徳宗教を加味せざるべからず。學問道徳を加味せざる政治は腐敗す、學問も亦道徳宗教の之に伴ふにあらざれば卑近淺薄なるを免れぬのである。而も三教一を好む者は其の二を惡み、一を好めば政を枉げ、遂に王道廢するに至らんと聖徳太子は十七憲法の中に仰せられて居る。先賢太宰春臺は既戸皇子の巧は制飾の聖、謚して聖徳と云ふも亦虚名に非ずと稱し、又大織冠藤原鎌足公は太子の高躡を欽慕して三教を併用し、天智天皇大化中興の大政を輔翼し奉りて、皇極の道、惟神の道を恢張せられたのを以ても聖徳太子の偉人たりし事が證せられるではないか。

四 和魂を發揮せよ

先師洪川禪師は餘り老教即ち老子經を喜ばれざりしが、先師の之を喜ばれざりしは世道人心の上より面白からずとせられしもので、決して哲學の方面より面白からずとせられしに非ず。哲學の方面より眺むる時は深遠玄妙の味ひのある事は老教の特色である。恬淡虚無獨自樂を主として世道人心と没交渉なる老教の如きは王道を本とする禪の排斥せられし所である。菅原道眞公も凡そ國家の要とする所、和魂漢才あるに非ざるよりは其の間奥を窺ふ能はずと云うて居られる。菅公の當時は和魂漢才ありしも、現代に於ける我々は更に和魂洋才を唱道せざるを得ない。火に入つても焼けず水に入つても溺れざる和魂を養ひ得て、而して後あらゆる洋才を活用すべしで、動もすれば西洋の文物に心酔する結果、洋魂洋才遂に日本人の拔殻たるが如き者となるは相戒しむべき事である。苟くも日本民族たる者は、山ゆかば苔蒸す屍、海ゆかば水漬く屍、あだには死なじの大和魂を發揮し、而して後あらゆる世界の學

問を學び、之を咀嚼し、之を消化し、以て大日本帝國の國本を培養するところの肥料とせねばならぬのである。

五 山崎闇齋の活眼

君臣父子夫婦の三綱はこれ日本精神の國體を形作りし國民道徳である。又仁義禮智信の五常は佛教の五戒に相當し、之あるがために王寶殿に登れば野老謳歌する所の天下泰平の根本力を養ふ事が出来るのである。翻つて西歐の國狀は個人主義であつて我が日本の如き家族制度ではない。故に孝行はあれども親孝子は無い。然るに若し我が日本に西歐の思想そのままに移すとせば如何、遂に賞勳局より孝行を表彰せらるゝが如き奇觀を呈し、親孝行を善美なりとせる我が精神の國風を傷くるに至らざるか。先年帝國議會に亭主浮氣取締法案と云ふ突飛なる議案の現はれしは、これ西歐の思想そのままを我が國に輸入せんとするもので、之を提出せし議員は恐らく孝行、國民としての主人公を没却したものである。

昔時山崎闇齋先生は、或日講經の序其の門弟に向つて若し孔子を大將とし孟子を副將として支那より日本を攻め來る事ありとすれば、諸子等は如何するぞとの問題を提出せしに、門弟子擬議して一人の對ふる者なし。其の時闇齋先生憤然として曰く、其の時こそ孔孟といへども其の素首を引抜いて遣るが是れ孔孟の教なり、諸子は活學をせよ、死學をするなど教へられし事あり。近時西歐かぶれの思想盛んに輸入せらるるに方つては、我が國民たる者は宜しく山崎闇齋先生の如き大活眼を刮して其の取捨選擇を誤らざるやう心すべきである。

六 修行の階梯

凡そ物事を修行するの順序は淺きより深きに入り、低きより高きに登るものにして、禪ひとり然らざるの理あらんやである。されば禪修行の階梯如何と言ふに之を第一向、第二奉、第三向、第四共功、第五功功の五段に分つ。向とは我を虚しうして向ふへ顔を向ける、凡夫が佛に向ふ、下臣民が上御一人に眞心を捧ぐるが如きもので、向の上に信を置いて信向、信

向は是れ禪修行の本となるべきもので、是れ微りせば天魔外道の禪に陥る。道の爲に喪身失命を顧みず、百尺竿頭一步を進むるのがこれ信向である。奉とは近臣天子の側に侍し、一擧手一投足にも戦々兢兢々として只管過失なからん事を恐るゝが如く、佛の如く言ひ、佛の如く衣、佛の如く食し、信奉するの謂である。功とは向を凡夫、奉を聲聞とすればこれ縁覺の位に當り、彼の十二因縁と云ふ如き法理を觀じ、迷といふ賊軍を平定して悟と云ふ金鷄動章を得るを指す、共功とは自利の巧のみに止まらず利他的の功をいふ。一切衆生を濟度して共に成佛す、我が悟るも亦一切衆生を悟らしめんが爲にして王寶殿に登れば野老謳歌す、天子が群臣萬民と共に太平の春を樂しまるゝが如し。功功とは無功の功、雪を擔つて井を填め、縁の下で舞踏を演ずるが如きものである。此の自利利他、無功の功と云ふ境涯にまで到り得ざれば禪の修行も些しばかり解つたとは言へない、無爲にして化す堯天蕩々たりである。こゝに至つては煩惱も煩惱でなく菩提も菩提でなく、譬へば錦旗を翻すが如く背面ともに是れ花、如何せいで花である。臨濟大師は「無事是貴人」と呼んで居られるが、我々は如何かして

此の立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は百合の花といふ身心一如の人格を得ねばならぬ。

七 儒教と佛道

古人の道に入りし順序を觀るに、彼の周茂叔は性より道に入り程明道は事より道に入りしもので、周茂叔が太極は無極なりとの學説は禪の上より得來つたる力、程明道の事とは彼が持微主一の説をいふ。朱意は窮理の上より道に入り、陸象山は疑情より道に入り、王陽明は研究より道に入り各々特色を有す。花は春の特色にして紅葉は秋の特色である。儒門百家の説各々紅紫燎亂たるも惜しい哉人を玉成するの法材に乏しいのである。儒門の法材乏しきに反し佛道は法材無量で、白隱禪師は此の法材を法身、機關、難透難解、五位、十重禁戒に分類せられて居る。否、白隱禪師のみならず、東禪寺の開山聖一國師も已に之を分類せられて居る。儒門に於ては桑の實を喰うて其の味を知らず、法材に乏しきの故を以て道味の鳳髓を嘗めず、また憐愍すべき哉である。

八 百尺竿頭進一步

先師洪川禪師は又道を修むるの階級を實學位、入德位、上堂位、入室位の四等に分たれて居るが、實學位とは學ばずと雖も自から德行ある人を謂ふ。或無智文盲の漢が一學者に對し生涯守るべき金言を問ひしところ、堪忍の二字を守れと云うた。漢怪訝な顔付をして、堪忍なら「カンニン」で四字ではありませんかと云ふ。學者曰く、それだから無智文盲の奴には困る、堪忍を解り易く碎いて云へば「タヘシノブ」であると云ふ。漢いよ／＼腑に落ちぬ面持をなし「タヘシノブ」なら又一字殖えて五字ではありませぬかと云ふ。茲に至つて學者先王大いに堪忍袋の緒を切らせ、此の仕方のない不漢奴と眞赤になつて怒り出したといふ面白い話がある。堪忍を教ふる先生が先づ怒り出すとは、是れ實學にあらずして虛學である。乃ち實學とは學ばずといへども道徳を實踐するの謂に外ならぬのである。又入德位、上堂位、入室位とは禪定に由りて道徳力を修養するの順序階級にして此の階段を登り了れば、最初の

階段たる實學位に立歸らざるべからずで、之を眞宗の言葉借り來れば往相還相、禪語にては向上劫來と名く。蘇東坡の詩に「廬山煙雨浙江潮、未到干般恨不消、到得歸來無別事、廬山煙雨浙江潮」と云ふも此の往相還相向上劫來の意味と一般である。洞山五位も亦正中偏は平等位にして入德位偏中正は差別位にして上堂位、正中來は赤心片々止むに止まれず衆生濟度に出懸くる一位である。兼中至は平等差別の殺人刀活人劍の兩刀使ひ分けにして龍の水を得るが如く虎の山に靠るゝ如くである。而して最後の兼中到は元の奎阿彌、裸の八兵衛にして、未到干般恨不消の修養を積み、又初めの廬山煙雨浙江潮に立歸つた何とも彼とも云へぬ心持の好い風景である。而して後潜行密修、凡夫の大いに力を用ひ來りし有難い眞の佛と成り得るに至るのである。

九 禪は不言の説法

禪は本來無言の雄辯、不言の説法である。スーウと斯う獅子座に登つて、スーウと斯う獅

子座を降れば、そこに無言の雄辯、不言の説法の妙諦存す。併しこれだけで好ければ宗教も佛敎も何物も要らるのであるが、活がそれから始まるのである。さて佛陀の敎へたる大乘の敎義、殊に禪の骨子はと言はゞ此の舌を動かさざる説法の上に在矣と謂つても好い。

試みに看よ、我等の思想にしても感情にしても乃至智慧にしても理窟にしても一度その最高潮に達した時には、いづれも無言の裏に歸するのである。哲學とか理學とか何とか彼とか言ふのは眞理に到達するまでのホンの道程たるに過ぎぬ。理窟をだん／＼詮じ詰めると、いづしか宇宙の實在に入り込んで無言無説となつて仕舞ふ。宇宙は一切の言舌を離るゝと同時に、人々の見様々々に由つて如何やうにも觀る事が出来る。形而上とも形而下とも、唯物論とも唯神論とも、將た又、有も眞理なれば無も眞理なりと觀られる。宇宙は洪荒にして偏倚する所がない、たゞ人々の見様々々に任して居る。

一〇 名刀の銘

昔時某所に一人あり、一口の名刀を買求めしところ銘に「波平行安」とある。然るに此の人は文字に疎くて其の銘を読む事が出来ない。そこで何でも彼んでも解らぬ事は壇那寺の和尚に聽くに如すと、早速和尚を訪問して「時に私は結構な名刀を手に入れましたが、一寸此の銘をお読み下さいませんか」と頼んだ。すると和尚は勿體らしく眼鏡でも掛けて「ハ、アこれはハヘイギヤウアンであるな」と御經よみ陀羅尼よみに読み下した。今度は又儒者先生に読んで貰ふと、儒者先生は咳一咳して波平かなる時は行く事安し、とあるからこれは多分備前長船の弟子でも打つたのであらう」と儒者先生は儒者らしい読み方をした。扱て檀那寺の和尚の読み方も儒者先生の読み方も本當には遠くして、刀銘としては誠に可笑しいとは云ふものゝ、満更月と鼈ほどは違つて居ない。ナミノヒラユキヤスが本當であるが、併しハヘイギヤウアンも波平かにして行く事安しも決して嘘なりと云ふ事は出来ない。

宇宙は洪大にして無窮無限である。如何に該博なる知識を傾倒して縦横十文字に論説しても、到底宇宙の凡てには當らない。されば宇宙の全體にあらざる所の一部、我々は日々夜々

宇宙の一部は讀みつゝあるのである。花は紅く柳は緑に山は高く水は長い、雪は白く墨は黒いと、絶えず宇宙の一部を讀みつゝあるのである。さりながら如何に之を讀み如何に之を論じても、宇宙の眞理その者は素知らぬ顔をして居る。月は圓いと評しても四角ぢやと品しても素知らぬ顔をして居る。雪は白いと議しても、黒いと論しても素知らぬ顔をして居る、彼の蒼々たる天は、これに向つて褒めても嬉しさを顔もせねば、罵つても怒つた顔をしな。唯だ天地間に蠢動しつゝある人類と呼ぶ動物のみ常に笑つたり泣いたり喜んだり怒つたり、肥我慢をしたり瘦我慢を張つたりして居るが、天は公平無私にして偏倚る所なし。大觀すれば宗教だ哲學だとグジャ〜言ふのは恰も赤兒が垂れたりひつたりするやうなもので、寧ろ眞理の汚點である。

實相を看破せよ

一 悪魔と人間

世間の人は何うかすると悪魔と云ふものはあるものだ、いや無いものだ、幽霊もあるものだ、いや無いものだ杯と盛んに其の有無に就いて論議する人があるが、これは論議するだけ野暮である。悪魔も幽霊も——幽霊も悪魔の一部であるが——有るものであればこそ、昔から其の文字まで製造してあるではないか、無いものならば第一文字のありさうな筈がない、然しながら有ると云つても決して自心を離れてあるものではない、即ち「心生すれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅す」で、お互の心の上に悪魔を生み出す性質があるから、悪魔は有るものである。若し夫れ心頭を滅却すれば、悪魔も幽霊もあるものでない、故に悪魔は果して有りや無しやの質問に對して直接簡明に答ふるならば、悪魔も幽霊も主觀的には有る

が客觀的にはあるもので無いと言下に於て斷ずることが出来る。

二 心は奇々妙々

人間の心ほど奇々妙々なものはない、端坐して實相を觀じ、恒に眞實眞正の心であつたらば、決して惡魔も幽靈も有つたものでないが。お互の心には煩惱妄想と云ふものがあるから、その爲に一種の暗示にかゝると云ふ性質がある。極卑近な例を申せば、青春の氣に充ちた一青年が、午睡後に惚寝け面をしてパイと門前へ出たとする、すると向ふから一美人が遣つて来て、頻りと右顧左盼、青年の顔をさし覗くと、青年は忽ち微妙なる一種の暗示にかゝつて、テキさん乃公に何か氣がありはせぬか知らと直ぐに有頂天に成る、焉ぞ知らん、美人の方では馬鹿に寝惚け面をした男もあつたもの位に思つて、差覗いてゐるのである。詰りかういふ風に人間の心には兎角暗示にかゝり易い性質がある。

三 人は暗示に罹り易い

又近頃は選舉運動が激しくなつて、世間には運動屋と云ふ屋號まで拜領してゐる者もあるさうだが、さういふ運動屋が出て来て、先生今度の總選舉には是非出馬なさい、縣下では先生を差置いて他に適當の候補者はありませぬ杯と、言葉巧みに遣つて來ると、始めの内は何を言ふのだ心にもない御世辭は眞平御免を蒙ると思つてゐても甲來り乙來り丙來り、異口同音に煽動で上げると、先きには鼻で扱つてゐても、終には暗示にかゝり「シテ見ると縣下では、自分が第一流の人物か知ら、男子生れて議政府に列す、何等の面目ぞ」と直ちに御天狗になる、ところが實際は然うではなく、第一流の人物は市中に鞘晦し、山野に隱遁してゐて煽動に乗る人物は、縣下到處にゴロ／＼してあると云ふ始末、が運動屋は第一流と稱さなければ金にならないから、巧言令色、手を替へ品を變へて、煽動に來るのである。けれども暗示にかゝつて居る悲しさ、一廉利巧な先生が、其處に氣付かずして、却てその爲め選舉運

動に乗出し、遂には親譲りの巨萬の家財も東の間に蕩盡すると云ふ始末である、かういふ風に人間の心は一種の暗示にかゝる性質を有つて居るが、此の暗示にかゝる性質が、聽ては惡魔に囚はれる端緒となるのである、

四 佛と惡魔

在昔釋尊が雪山六年の苦修中に於て、種々なる惡魔が釋尊の身邊を圍繞し、或は美人となり、或は權貴となりて、種々釋尊を誘拐した、けれども釋尊は端坐して實相を觀じ、毫も惡魔の爲めに心を動かされなかつたと云ふ話が經文の中に澤山出てゐる。故に我佛教では惡魔の事に關しては、既に充分に研究されて居る。だから惡魔と云ふものは必ず有るものである。現に吾々が雲水時代に坐禪をしてゐる時には、時折經驗することもある。坐禪をして惡魔に出逢ふのは、眞正の坐禪ではないが、一生懸命、坐禪に熱中し、精神の興奮した場合には、ともすると妖怪に出逢ふことがある。妖怪に出逢ふことは勿論願ふことではないが、併し妖

怪に出逢ふのは一面坐禪に熱中してゐる反證とも云へる。以下一つ二つ幽靈談をして見る。

五 幽靈の正體

或る處に一人の僧があつて、その僧が慈明引錐の故事に倣うて錐を前に置き、睡魔もし襲ひ來らば、股を刺して睡眠を覺醒せんと、端然として坐禪をして居た。すると何處となく美人の幽靈が出て來て種々態言を述べたさうである。乃で其僧は「己れ、この惡き幽靈め」とイキナリ件の錐を取つて幽靈の脇腹へ突き刺したと思つたは一種の幻覺であつて、却て自分の股へ錐を突き刺してゐたと云ふ話がある、かういふ風に幽靈と云ふものは決して自心を離れてあるものではない。

六 亡妻の幽靈

又かういふ面白い話もある。或る處に少しく神經過敏な人があつて、妻を娶つてゐた。其

の妻が肺炎か何かで病床に臥し、一日瘦せ片時瘦せて、だん／＼衰弱し、遂には藥石効なく途に死亡して仕舞つた。ところが長らく妻の病床に侍して看護してゐた夫は、妻が見る影もなく瘦せ衰へて、殆んど實際の幽霊と見違ふばかりに衰れた姿が、深く其の人の神経中樞に喰ひ入つたものか、野邊の送りを済まして一兩日を経ると、その人はガツカリと元氣を落し、その爲め自分は神経衰弱症に罹つた。さうしてその頃より毎晩々々亡妻が枕頭に現はれて来るやうになつた。始めの内は友人にも深く秘して居つたが、何分毎夜の事で、その都度得も言はれぬ苦痛を感じる所から、彼處の寺此處の寺と祈禱を頼んでも見たが、更に效驗がない。或日のこと一友人に逢ひ、實はかく／＼の次第でと打開けた。その時友人の言ふには「それでは君、かく／＼の和尚が居る、此の和尚は非常な高德の和尚であるから、その和尚の處へ往つて包み藏さず萬事を打開けて相談し給へ、或は怨敵退散の法を教へてくれるかも知れぬ」といと懇ろに教へて呉れた。其處で其人は大に喜んで、早速和尚の處へ往き、實はしか／＼の譯でと、萬事を物語つた。和尚は圍爐裡の側で逐一聞き取つて、さうして言ふに

は「それは誠にお氣の毒である、然らば幽霊退散の法を教へてあげよう」と云ひつゝ、幸ひ圍爐裡の側に盆に盛つた澤山の炒豆が有つたから、その炒豆をグツト一攫み攫んで「お前に此の炒豆を與へるから持つて行け、若し幽霊が出て來たならば、之は何であるかと訊ねて見よ、幽霊は必ず炒豆であると答へるに相違ない、炒豆と答へたら、幾粒あるかと問ひ返せ、左様すれば幽霊は忽ち退散して爾後決して出て來ぬであらう」と教へて呉れた。其處で其の人は一攫みの炒豆を貰つて御辭儀をして門前へ出たが、途中つらく／＼考へて見ると、何だか狐に魅まれたやうな話である。炒豆にどれ程の効力があるか知らないが、要するに炒豆は炒豆であつて、たいした功德も功力もありさうには覺えぬ。恚んな炒豆位で幽霊退治が出来るならば、先きに祈禱を頼むではなかつた。兎に角あの和尚は名僧である。名僧の教へに偽りはあるまい、何は兎もあれ教へられた通り行つて見るが好いと、件の炒豆を持つて家に歸り其夜枕邊に置いて寝た、亡妻の幽霊は例によりて缺席はしなかつた。でその人は教へられた通り炒豆を差出して、之は何ちやと問ふ、幽霊は炒豆であると答へた。幾粒あるかと問ひ返

すと不思議にも幽霊は掻き消す如く消え失せて、其後一切出て来ないやうになつた。乃で其人が思ふに是れは如何にも不思議である、和尚の教への如くしたら、幽霊は果して退治が出來た。炒豆に何の功德があるか知ら、是れは後學の爲めにも是非聞いて置かねばならぬとて、其後和尚を訪ね「禪師よ、炒豆にどれだけの効力がありますか、幽霊は炒豆により果して退治が出來ました」と云ふと、其時和尚は怒りにその理由を聞かして呉れた。和尚曰く「炒豆に何等の功德も効力もあるものでない、お前の亡妻が幽霊に成つて出ると云ふのはお前の心の迷である、決して亡妻が出て来るのではなくて、お前の心が幽霊となつて現はれるのだ、其證據には炒豆を差出して之は何ぢやと問うたら炒豆であると答へたであらう。答へる筈であるお前が知つて居るからだ。第二回目に幾粒あるかと問うた時、幽霊の答へ得なかつたのはお前も亦幾粒あるか知つてゐないからである。シテ見れば幽霊と云ふも決して自分を離れてはない。幽霊が出ると思ふのは心の迷である」と、懇々垂誠を聞かされて始めて合點がゆき、それから遂に神經衰弱症も、自然に根治されたと云ふ話がある。

七 心滅すれば法滅す

此の如く幽霊とか悪魔とか云ふものは、決して自心を離れてあるものでない。「心生すれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅す」とは此事である、心頭を滅却すれば火も亦自ら涼し、沉んや幽霊の有無をやだ。であるからお互に自身を修養して、暗示にかゝつたり、若しくは悪魔に襲はれぬやうにせねばならぬ。酒の好きなものは酒と云ふ暗示にかゝり、婦人の好きなものは婦人と云ふ悪魔に囚はれ。金の好きなものは金と云ふ悪魔に囚はれて、それが爲めに身を滅す者は世間其の例に乏しからずだ。で若し暗示とか悪魔にかゝらんとして、これは怪しい、これは胡散なと思つたら、直様内に取つて返して自己に返照するのだ。即ち端坐して實相を觀するのだ。端坐と云へば直に姿勢を正して坐り込むことと思つてはいかぬ。端坐とは心の端坐だ、心の坐禪である、此の人間世界は一面から觀察すれば、悪魔の世界である到る處に悪魔は牙を剥き齒を鳴らしてゐる、迂濶りして居れば、生き馬の目の玉を抜かれる

世界である。斯る不安定な、物騒千萬な世界の海に寄せ来る狂瀾怒濤と戦つて、而も悠々と船を漕いで渡るには、先づ夫れ端坐して實相を觀すると云ふことが必要である。端坐して常に實相を觀じてゆけば、如何なる順逆の境に處しても、外境の爲めに氣を奪はれると云ふことはあり得べき筈がない。

誰か是れ主人公

一 僧侶の本分

その昔印度の國などでは、人が大病に罹つて重態に陥り、醫者が藥を投じたとなれば、今度は僧を病床に迎へるのが例になつて居つたもので、故人も臨終前に幸ひ僧に接見して瞑目するを得たから、誠に有難く悦ばしい次第であると、家族の者も友人も親戚も、皆な之を悦びにしたものだ。臨終前に僧を病床に迎へて頻死の病人に接見せしめ、之に安心を得させ

て呼吸を引取らず習慣は、古い昔の中印度に行はれて居つたばかりではない。西洋の耶蘇教國にも、現に今なほ此の習慣が行はれ、英國々教會の慣例では耶蘇教の僧が病床に迎へられて、臨終前の重病人に親しくサクラメントと申す聖體機密の禮を授け、病人が安心して最後の呼吸を引取られるやうにしてやるのである。しかし日本では今日まで久しい年代の間、僧侶が死んだ人間を取扱ふ事許り慣れてしまつて、生きた人間を取扱ふ事を等閑にして來たものだから、坊主が袈裟でも着けた僧形の姿で、病人の見舞にでも往けば、普通の民家では之を非常に縁喜惡がつて、あの家には坊様が來たから、病人も既う駄目だらうなどと、近隣で噂し合ふくらゐのものだ。病人で心配して居る處へ、斯んな嫌な感じを起させるのも氣の毒だと思へば、僧侶は浮つかり病人の見舞にも往けぬのである。世間は萬事萬端、總て斯くの如きもので何事も意の如くに行ひ得ず、一寸見たところでは如何にも窮屈不自由である。

二 隨所に主となれ

然し、世間を窮屈な不自由の場所であるかの如くに感ずるは、未だ修業の到らぬ人間の事
 で、若し釋迦牟尼世尊御在世の時に現れた維摩居士のやうに充分に修業を積んで佛に近いも
 のになつて仕舞へば、到る處に其の主人公となり得る事が出来、毫も窮屈やら不自由やらを
 感ぜずして、一生を生活し得らるゝものである。人事を苦しい、辛いと思ふのは、隨處に主
 人公となるべき筈の貴い心を、隨處の奴隸にして仕舞ふからである。車が主人公で自分は之
 に曳き廻はされて居るのだと思へば、苦しくもあらうが、自分は車の主人公で之を曳き廻は
 して居るのだと思へば、如何に車を曳くのが稼業の人でも、其稼業を苦しい辛いと感ぜずに、
 日々を送り得られるものである。されば、唐の(玄宗皇帝の)臨濟禪師は「隨處に主となれば
 立所皆な真なり」と説かれ、如何なる境遇に入つても其の境遇を支配する主人公となりさへ
 すれば、到る處可ならざるは無しと申されて居る。孔子が中庸に於て「富貴に素しては富貴
 に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素して患難に行ひ、
 君子は入るとして自得せざる無し」と教へたのも、亦耶蘇教の聖書に「萬物我に可からざる

無し」とあるも畢竟、臨濟大師の所謂、隨處に主となるの功德を説いたものに外ならぬのだ。
 隨處に主とならうとするには、如何したら宜い乎——己れは豪いぞ天下無二の豪傑だなどと
 威張り散らして騒ぎ廻らなくつても、修業がチヤンと出来上つた佛の心にさへ成つて居れば、
 一言を發せず末座に溫和しく控へて居つても、周圍の人々は、自然と頭を下げて其人を尊敬
 する者である。維摩居士は如何に黙して居つても、其聲が百雷の如くに響いたと云ふでは無
 いか。維摩居士の如く修行を積んで佛と成り、君子と成り、聖者と成つた者には、敢て装は
 無くとも、自然の權威が具はり、人をして威服するに至らしむるものである。

三 貪著する勿れ

世間を見渡すに學問もあり才能もあり、財産も富裕で、何不自由なく生活して行ける多財
 富樂の人でありながら、存外精神的には貧弱で、心の貧しい者が無いでもない。こんな人は
 有り餘る學識才能財産を抱きながら、其日々々々を狭く苦しく感じて生活するものである。學問

でも才能でも財産でも、幾ら多く有つたからとて悪いと云ふ者では無い。多くあれば有る程結構な者だが、動もすれば、多財富樂の境遇にある人は、學問とか才能とか財産とかの上で臨んで、是れの主人公たるべき貴い心を、却つて是れが奴隸にして仕舞ひ、學問、才能、財産に貪著し、之に囚はれて仕舞ひ易いものである。學問のある人、才能のある人、財産のある人の過誤は、總て皆な其の學問、才能、財産に貪著するより起るものである。天才を以て目せらるゝ程の稀世の才を懐いた人の一代が、意外にも醉生夢死の生活に終つて仕舞ふ例が世間に能くあるのも、一に其人が懐く其の天才に貪著して、己れは天才であるから豪いぞと、天才に囚はれて天才の奴隸となり、天才の主人公と成つて天才を自由自在に追ひ廻さぬより起る事である。佛教は決して人に慾を斷てよと教へはせぬ。慾は人にあつては害に成るものではない。益々學問の造詣を深くせんと心懸けるのも宜しい。益々財産を殖さうとするのも宜しい。益々才能を伸長させようとするのも亦宜しい。が然し、之に貪著して追ひ廻されるやうに成つては悪いのである。人は之を追ひ廻す主人公と成らなければならぬものである。

る。佛教で排斥するのは貪著である。慾では無い。人苟くも隨處の主と成らうとすれば、まづ何より先に貪著の念を棄てる修行が大事である。此の修行が足らぬと、隨處に主となり得らるゝものではないのである。

四 生活に超然せよ

富樂の生活を営みながら心が至つて貧しく、學問、才能、財貨に貪著する人の様に、丁度之と反對で、如何に貧困の生活を営んでも、却つて其心の富裕な者が、世の中にはある。希臘の古い哲學者や孔子の弟子等の中にも斯る人物の例が少くない。「一簞の食一瓢の飲、陋巷に在りて人は其憂ひに堪へず。回や其樂みを改めず。賢なるかな回や」と孔子が賞讃せられた顔回の如きは其一人で、衣食住の奴隸と成らず、常に衣食住の主人公と成つて居つたから、如何なる茅屋に粗衣粗食の生活を営んで暮らしても、心は至つて富裕で、四六時中愉快を禁じ得ず、毫も不自由とか窮窟とかいふものを感じなかつたのである。希臘の哲學者で西紀前

四百十二年に首府アテネに生れ同三百二十三年に没したデオゲネス等も亦、此種類の人物で、常に粗衣粗食して神殿の軒下などに眠つて暮らしたものであるが、遂には桶を横へて之を我が家とするまでに成つたのである。會てコリント市に遊んだ時に、彼の有名なるアレキサンダー大帝はデオゲネスの嘖々たる盛名を聞き及んで、一日デオゲネスが例の桶を横へて其の中に暮らして居る所へ訪ね來り「朕はアレキサンダーであるが、大人の爲に何事か盡力して上げたく存する」と申されると「そんなら日光を遮らぬやうに、一寸そこに避けて呉れ」とデオゲネスが答へたので、大帝をして「我れ若しアレキサンダーたらずんばデオゲネスたらん」と嘆稱せしめたと云ふ事は、能く人口に膾炙する有名な逸話である。かくの如きも亦、衣食住に貪著せず、學問、才能、財貨の上に超然として之が主人公たり得る修行を積んだ上で、始めて會得せられる心情である。

五 我儘は禁物

金満家だとか貴族だとか申す者は、兎角我儘なものである。柄から宗教上精神上の法話でも聽かうと思ふならば、成るべく衆と共に聽法致さうとの念慮になり、自ら進んで提唱の會などに出て來たら可さうなものであるが、金満家とか貴族とか申す者になると、さうはせず、兎角柄を自家に招んで聽きたがるものである。柄は招ばるれば之も道の爲めで、濟度の一方便であると思ふから、招きに應じて出かけて行きもするが、金満家や貴族は、總てが斯んな調子で我儘な者である。什麼も位置があつたり財産があつたりする者には忍耐力が無く、少し我が意に逆らふ者がありでもすれば、直ぐ怒つて瞋恚の焰を燃やす傾向のあるものだ「一度呼べば百諾す」と謂つたやうに、總ての人を我が一令に服さしむる様にしたと云ふのが彼等の心情である。つまり、忍辱の心が無いのである。之も畢竟するに、位置とか財産とか云ふものゝ主人公となる事が出來ないで之に貪著し、是丈けの位置門閥があり、是れ位の財産があるからは、世間は皆な自分の命のまゝに成つてもよさうなものだなどと思ふからの事である。單り貴族や金満家ばかりでは無い。總じて日本民族には堪へ忍ぶと云ふ忍

辱の精神が乏しく、兎角怒り易い性質がある。米國あたりに出稼ぎして居る日本移民は、正直だと云ふので悦ばれもするが、忍辱の精神に乏しく無宗教だと云ふので、毛蟲や蝮の如くに嫌がられもする。三ヶ年の契約で雇はれたものでも、何か主人が無禮な事をしたからとて直ぐ怒つて仕舞ひ、月給などは入るものかと、六ヶ月も働かぬうちに飛び出して仕舞ふのは、米國にある日本移民に就て能く實現する通弊である。そこに行く支那人は感心な者で、爲に少々卑屈に流るゝ弊も有らうが、如何に侮辱されても一旦契約の年限だけは忍耐して堪へ、忠實に勤め上げ、途中で飛び出して仕舞ふ様な事はせぬのである。是は支那人の美德として世界でも評判に成つて居るが、人間は自分を潔うしさへすれば、それで佳いと云ふものではない。契約年限の途中で雇人に飛び出されて仕舞つては、雇主は豫定して置いた人数に不足を來し、大いに迷惑を感じる事になる。雇人としては雇主に迷惑を掛けぬ様にするのが道である。「おれは日本人だ」と云ふ所に貪著すれば、却つて日本民族の美質を失ひ、日本人の評判を世界に悪くする事になる。

六 見思の惑を脱せよ

學問をした知識の博い人には、また我慢我見が強いと云ふ悪い癖のあるものだ。當節の元老とか元勳とか稱せらるゝ如き老人も亦、却々我見が強いやうに思はれる。單に俗人のみでは無い。禪僧などの中にも、我慢我見の強い者が無いでもない。日蓮上人は「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」と當時の宗旨を喝した事がある。禪僧が若し自分の我慢我見に貪著して、之に追ひ廻されて居るやうでは、日蓮に「禪天魔」と罵られたからとて一言もない。學者は又、自分には是丈の知識が有るのだから自分の觀念には間違つた所は無い。必ず正しいものであると思ふ——之が又我慢であり、我見である。かう我慢我見が強くつては、本當の學者にも智者にも成り得られないものでは無い。そこに至ると「我れは渺茫たる眞理の海濱に二三の小石を拾ふ小兒の如し」と嘆じたニウトンは、流石に豪いものだ。之は自己の修めた學問、知識に追ひ廻されず、之を追ひ廻す主人公たるを得るに及んで、初めて入り得

らるゝ境界である。

維新時代に功を立て、今日元老とか元勳とか崇めらるゝ人々の中には、却々我慢我見の強い者が多く、宗教などは無用の長物であるかの如くに考へ、御當人等の盛に活動した頃には排佛と稱して、佛寺佛像などを破却したものである。ただ自分が少しばかり學んで置いた知識學問にのみ貪著して他事が解らなかつた結果である。今日の官吏の中には、若い人ほど却つて宗教の事を理解するが、之は我慢我見に促へられず、花は紅、柳は綠と、天下の事物を敬虔の念慮を以て觀察する傾向が青年の間に生じた結果である。嘗て衲が或る元老に對ひ、宮中には御進講と申す事があるやうに承はるが、日本國民には無宗教の者は先づ以て無い程故、御進講申し上げる科目の中に宗教も加へたら宜しからうと申すと、その元老は衲の言葉によつて、初めて成程と氣が付いたらしかつたのである。一に我慢我見に促はれた結果である。人は決して我が修めた學問知識の奴隸となつては成らぬ。宜しく其の主人公となる事を一意に心懸け、其の修行を積むべきものである。

一念子を看取せよ

一 光輝大千に滿つ

天地一點、萬籟寂として聲なきところ、僧あり大々として坐定に入つて居る。寒骨鐵の如く、冷頭灰の如き様子、身は之れ紙窓の下にありて心は遠く白雲流水の間を逍遙して居るのであらう。時に心頭聲あり、忽然として瞑想より覺めた。

徐かに眼を開けば、一輪の紅旭簪を射て、光輝大千世界に充滿して居る。坐ろに耳を欬つれば、百八の華鯨天に吼えて、音響盡天盡地を震動して居る、正に是れ洪鈞回轉を報ずるのである。

二 人間の時節

この時、壁間の木上座、莞爾として抄著を下して曰く。

「二年の計は一月にあり、一月の計は一日にあり、一日の計は一朝にあり、未審し

一朝の計何れの處にかある」

と、僧噓一噓して曰く、

「一朝の計は只個の一念子にあり」

と答へた。然り、この一念子である。一念變ぜざる底より觀れば新人は舊人の如く、新年は

舊年に似たりである。故に、

「年々歳々花相似たり、歳々年年人同じからず」

と云ひ、古頌に曰く、

春有_二百花秋有_二月。夏有_二涼風冬有_二雪。

若_レ無_二閑事掛_二心頭。便是人間好時節。

之は自然界を詠つたものであるが、春になれば誰が命令するでもないが、うらくと春風

が吹いて花が咲いて来る。鶯が谷間を出で、法華經と妙なる轉りをする。月は何時でもあるが、取分け秋の月は皓々として冴え渡る。夏は暑いと同時に涼しい風が吹いて来る、冬になれば白妙の雪が降つて来て、一望銀世界である。若し閑事の心頭に懸るなくんば、即ち是れ人間の好時節で、自然界は吾々にかういふものを與へて、吾々を慰め樂ましめて居る。人間致々として終日働いて居るから、其勞に酬ゆる爲めに之を遣らうと、春は花、夏は風、秋は月、冬は雪を與へてくれる。しかし人間閑事が心にかゝるから、斯る恩賞に干つて居りながら煩悶に苦んで居るのである。

三 禪者の本分

故に此一念變ずる底より觀れば、少年は老年に非ず、今日は昨日に非ずである。されば孔子は、

「吾れ十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、

六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に從へども矩を踏えず」と云はれた。之が漸次修養して行く境界である。又古人は、

「唯事の眼前を追うて過ぐるを見て、覺えず老の頭上より來ることを」とも云ふて居る。經に、

一功有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如如觀。

とあるのが是である。

即ち手を覆へば不變なり、手を放せば隨緣なりである。要は唯箇の一念子、畢竟自己の造物主にして屋裡の天真佛、亦之を法界の無盡藏とも云ふのである。若し夫れ一年の計は一月にあるを知り、一月の計は一日にあるを知り、一日の計は一朝にあるを知らば、一朝の計は須らくこの一念子あるを知つて、一念これ什麼ぞと看取するのが新年に處する禪者の本分である。經に曰く、

無邊刹境。自他不隔毫端。十方古今、始終不離當然。

と、子、亦別に一伽陀あり、試みに左に誦す。

開撥個中無盡藏。元正何物不呈祥。

寒梅示我新訣。花在冰霜堅處香。

至極の大道

一 豈に舌頭を弄せんや

至道無難、至極したる大道に達すると、そこには東西南北の空間も無ければ過去現在未來の時間もない。溝渠もなければ城壁もない。是非もなければ曲直もない。しかも天言はされども四時行はれ、地語はされども萬物成育す、至道無難の當體什麼生と云ふに、西洋の諺にも雄辯は銀の如く、沈黙は金の如しとある通り、物の至極に達する時は言語を離る、妙用無語の地である。熱いと口に云ふ時は已に熱いを通り越して餘程時間を過ぎたる時である。

冷たい旨味も口にては遅八刻、口に残るものは糟粕ばかりである。熱いと云つても舌を焼かず、冷たいと言つても唇は潤うて居ない。心の奥の院は唯だ知る人ぞ知る。此の奥の院よりズウと広い世界を眺むると、如何に富樓那の雄辯を揮つても、いかに一切藏經を横説堅説しても、無窮無限に活動して止まざる絶大の眞理とは没交渉である。

釋尊拈華し迦葉微笑す。眞理の當體より云ふと此の一瓣の花が廣長舌を揮つて一大説法をして居るのである。此の一瓣の花が即ち大雄辯大獅子吼、百千の蘇秦張儀出現し來るも到底これに及ばないのである。元來言葉や修辭は眞理に衣裳を着せたやうなもの、紅粉を施したやうなものである。此の眞理と呼ぶ古今無雙の一人に衣裳を着せず化粧を施さずして、丸裸の儘有の儘を見せようとするのが禪である。凡ての眞理は紅粉を塗らざれども自から風流なる點にある。此の風流なるところ即ち是れ禪である。感極まれば辭無し、これはく〜とばかり花の吉野山、松島やあゝ松島や松島やで、絶佳なる風景、絶妙なる眞理に對しては一言半句の言葉も出ない、言はゞ言うただけの痕がついて汚い。これ釋尊法を説く事四十九年、

而も最後に一枝の金波羅華を拈して言葉を離れられし所以である。孔子も亦我れ言ふ事無からん事を欲すと云つて居られる。天何をか言ふや四時行はる、地何をか言ふや萬物成る、論語を読むのは黄金の山に入るに齊しく、論語の最も尊いのは斯う云ふ所の句にある。天は潜移默遷、春來れば花、秋來れば月、バラリと落つる梧桐の一葉にも、ホロリと落つる露の一滴にも、大説法大獅子吼を作して居るのである。

二 衆生本來佛なり

人間は如何に長命を保つても醉生夢死に了つては百年の壽も猶蟬蟻の生涯の如しである。それ人生には大なる意義、大なる理想あり、此の大なる意義を解し、大なる理想を實現してこそ始めて眞の長壽の人といふべきである。彼の大隈侯の壽百二十五歳説の如き、若し自利利他の菩薩の大誓願心なかりせば、世に長壽と云ふ事ほど厄介なものはあるまい、假りに自分一人百二十五歳まで長壽するとせば如何。四邊に親兄弟も居なければ竹馬の學友も居ず

淋しい人生の岸に取残されたるは俊寛僧都ならぬ自分たゞ一人。其の又自分も頭は禿げる齒は抜ける、耳は聾する眼は疎くなる、恰も風の冬に、一莖の青草も無い沙漠の中に立つたやう、年若い心孤なりで、長壽は寧ろ人生不幸の第一となるに至らう。併し之に反して人生を意義あらしめ、理想を實現せしめ、國家民人の福徳海無量壽を圖らば、それが直ちに人間の長壽である。さらば人生の意義、理想の實現とは什麼生。これ見性成佛より急なるは莫き所以である。

衆生は本來悟つて居るが、たゞ悟つたといふ自覺を缺いて居るばかりである。これは衲一人の詭辯ではない、佛も亦衆生本來成佛と仰せられて居る。我は本來佛なりと自覺し、人生を意義あらしめ、理想を實現するに於て、これ以上の尊嚴さはあるまい。然るに或宗教では人間は罪の子なりといふ、是も一面からの觀察に相違はないが、甘んじて自ら下劣漢となる弊がある。又或宗派では自力を以て成佛する事は出来ないといふ、是れ亦その宗派の立場地よりして餘義ない主張ではあるが、其の道に當る者は更に一步進んで自力他力の極致の同

一なる點を究明せねばならぬ。自力即他力、他力即自力「唱ふれば彌陀も佛もなかりけり磯の鷗は波のまに〜」これ抑も自力か他力か。

三 ありのまゝの脱落

禪道の上に於ては元來嫌ふ底の法なし。臨濟大師も我が見處に約せば嫌ふ底の法なしと説いて居られる。南無阿彌陀佛も、南無妙法蓮華經も、摩訶般若波羅蜜も、將た又アーメンも悉く是れ白馬の白と蘆花の白と相似たるもので、我が見處に約せば嫌ふ底の法なしである。而して此の嫌ふ底の法なき端的を識得する方法如何といふに、これ亦臨濟大師の「面影聽法底の人のみあつて他に馳求せず」と説かれし通りである。

人間は銘々自分勝手に好悪や揀擇をつけて居るが、一朝豁然として衆生本來成佛と大悟徹底せんか、出でゝは龍となり入つては蝸牛となり、地獄も天堂も到る處我が家となり、天空海潤、鳥の飛ぶに任せ、魚の躍るに隨ふ大度量を得るに至るのである。併し此の本來成佛の

衆生が衆生本來成佛と悟るは其の間卵の毛一本、薄紙一枚の隔てであれど、此の垣一重が黒鐵の叩くにも叩かれずで、從上出世の諸佛はいづれも此の垣一重の爲に粉骨碎身を辭せられなかつたのである。

眞理はありのまゝである、ありのまゝは眞理である。大抵は他の肌骨の好きに還す、紅粉を塗らざれども自から風流で、ありのまゝほど美しいものは無い。ありのまゝには嫌ふ底の法なく着する底の法なし。之を嫌ひ之に着すると美を損じ、自由を失ふ。下等は禽獸の慾に着し、中等は知識上の慾に着す。上等は佛と法に着し、赤き物を見れば赤、黒き物を見れば黒に迷ひて色々の衣物を着ようとする。而し一度この衣物を脱ぎ去つて、ありのまゝの赤裸となり、阿吽の當處に早變りして見ると、そこには嫌ふ底の法なく着する底の法なし。小さき別荘や邸宅よりも世界中を寢所とした、彼の高杉晋作の都々逸ならねど、「三千世界の鴉を殺し主と朝寝がして見たい」と云ふ大丈夫の氣宇を得るに至る「骸骨の上を粧ひて花見かな」の形體上の美人よりも雪の白さとも花の紅さとも何とも彼とも言ふに言はれぬ精神的

美人を愛するやうになる。

四 天地一枚萬物同根

昔紫野大徳寺の一休和尚が、冠笠を被らず炎天に禿頭を晒しながら、京の町を歩いて居られると、途中で某大名が斯くと見受て早速冠笠を買うて和尚に進ぜようとした、和尚は「衲は天を冠笠とし青天井を冠笠として居る、そんな小さな冠笠は不用である」とサツサと行過ぎて仕舞はれた。スルト後日和和尚が其の大名の邸を訪はれた時、大名は前日の敵打をする氣で「禪師笠を冠りながら無禮で御坐らう」と槍込めると和尚は啞々と大笑し「こんな小さな家には天といふ衲の冠笠の脱ぎ場がない」と答へられたが、これ一休禪師が着する底の法なきを示されたもので、苟くも大丈夫たる者は常に天地を笠鞋とするの大自覺がなくてはならぬ。

五 文明の悲哀

文明の半面はたしかに悲哀である。生活難や職業難に追ひ廻されてあがき死に死ぬ者の夥しいのは、これ文明の悲哀にあらずして何ぞ。外界已に斯の如し、内界も亦これに伴うて懷疑に陥り、迷より迷に入り、闇より闇に入り、表面より文明開化と云へば名稱は立派なれど、之に伴うて煩悶懷疑の附き纏ふを奈何せんやである。それで人々は其の學問知識の程度に隨ひ、精神の慰安を得よう／＼と努めて居る。これ今日の時代傾向で寧ろ喜ぶべき現象ではあるまいか。

精神を修養せんとするには、何物かの標準を立つるにあらざれば勞多くして功少ない。彼の大學明德の一章の如きは精神修養上に於ける立派なる標準である。自己の妍醜を照らす所の一面の明鏡である。心を鍊るには禪家の公案のみならず、儒教の語にも公案とすべきものが亦頗る多いのである。昔時盤珪禪師は此の大學の道は明德を明かにするに在りの一章を疑

着し、何をか明かにする、已に明々たる明德を明かにするとは甚麼の意味ぞと、不斷に正念相續して、或夜小塚原なる獄門梟首と睨ツ子をしながら、明德とは何ぞやと拈提し、或時は勇氣と定力を鍛鍊すべく芝愛宕山の急峻なる石段の上にて修行するなど、恐るべき境遇に身を投じて刻苦せられたのである。

六 大學の道

さて明德を明かにする。明德——の概念が起るや否や、活ける明德とは何ぞやと我が心の内、深く／＼極め去り窮め來ると、始めて闇夜にチラリと星の光を發見する如く明德を認識する事が出来る。如何な闇がりの中にも、須臾して物の影の浮んで來るやう、道なき處に道、光なき處に光を發見して、遂に明德と我が心とピタリと一致するの境界を得るに至るものである。

大學明德の一章は孔門中の秘訣である。大學の道は明德を明かにするに在り、民を新たに

するに在り、至善に止まるに在り、止まる事を知つて後能く定まる、定まつて後能く静なり
 静にして後能く安じ、安くして後能く慮かる、慮かつて後能く得の一章はこれ儒教の三綱五
 術にして、止定靜安慮の五術は坐禪修業の方法と少しも異なる所は無い。明德とは字の示す如
 く明かなる徳、建仁寺の開山千光榮西禪師と日月星辰以上に心の明かなる事を興禪護國論に
 説いて居られる。譬ふれば明德は明鏡に似て、種々の色や様々の姿そのまゝを寫して居る。
 有機體となく無機體となく世界中は一枚の明鏡に收まつて居る。山は峨々、水は溶々、花は
 紅、柳は緑、いづれか我が日光たる心鏡に映するの影ならざるは莫しである。而も我れに一
 顆の明珠あり、久しく塵勞に埋没せらる。我々の人慾の私のために此の明鏡を自覺すること
 能はされども、之を止定靜安慮の順序を以て明かにし、自ら明德を明かにすると共に他の明
 徳をして明かならしむる、之を民を新たにするに在りの利他といふのである。明德新民の自
 利利他相須つて至善に止まる。至善とは絶對の善、善惡を超越したる善、自愛他愛相待つて
 實行するの善である。

止定靜安慮、之を五術と謂ひ、明德を實現せしむる修養法にして、孔子の如き聖人の言葉
 には天地自然の理法を包み、四時運行の理法を含む、ソヨ／＼と春風吹き初むれば花笑ひ鳥
 歌ひ、誰號令するもなく夏となり秋となり冬となり、舊い大晦日の末に早く己に新しい元日
 兆す。始めが終り終りが始め、新を逐うて舊を捨つる勿れ新は舊の始め、舊を好んで新を厭
 ふ勿れ舊は新の終り、天地には自然の定則あり自然の秩序がある。一年毎に咲くや吉野の山櫻
 木を割りて見よ花の在處を、枯木の枝の上に早くも干朶萬朶の櫻の花は準備せられてあ
 る。形こそ無けれ、眞理はチャンと宿つて居る通り、孔子の如き聖人の言葉には天地自然の
 法則が備はつて居る。止定靜安慮にして能く明德を得、明德を得て而して後また始めに立歸
 る、これ恰も四時の運行の規律正しきに似て居るではないか。

明德を明かにし、民を新たにし、至善に止まるは是れ大學の三綱領にして、之を我が物に
 せんとするには、まづ止水明鏡、天台止觀の心地に入らねばならぬ。心已に止まれば夏雲奇
 峯多かりし五慾七情はこゝに定まつて秋月明輝を揚ぐ、心定まれば能く靜かにして忙中の閑

動中の靜、苦中に樂を求め、逆浪にも順風に帆を揚げ、禍中にも却つて福を得、まづい物にもうまい味を得るの心的修養が出来る。心靜かにして能く安く、心安うして能く慮かり、慮かつて後能く明德を得、此の大學明德の一章、之を回文の法と稱するのだ。始まつては終り、終つては始まる、宛ら環の端無きが如く、絶えず精神を修善せんには、茲に始めて明德は昭々乎たり、大我實我は現前し、無上大法は活躍するのである。然るに諸人いづれも松山鏡ならぬ自己の影法師に迷うて止まる事を知らず、心外に法を求めて定まる事を知らず、懷疑煩悶に陥つて文明の悲哀をして轉た悲哀を増さしむ、また懸然の至りではないか。

七 僧肇法師の遺偈

「四大元非有、五蘊本來空、將頭臨白刃、恰似斬春風」とは彼の羅什三藏が四哲の一人なる僧肇法師が秦王の爲に其の首を刎ねられんとする時、從容自若として唱へられた一喝である。さて秦王が何故此の僧肇法師を刑場に引いて斬に處したかといふに、秦王は羅什三

藏の門下に在りても殊に僧肇法師の秀才なる事を識り、之を遷俗せしめて政治上の顧問、黑衣の宰相たらしめんとした。所が僧肇法師は識見高味にして之に應ぜず。一旦出家したる者は假令國王の命なりといへども俗界の政治に携はる事を屑しとせない。況んや遷俗に於てをやと、富貴を視ること恰も浮べる雲の如く、再三再四拜辭して受けざるを以て遂に秦王の命行はれず、違勅の罪重しとて無慘にも斬罪に處せらるゝに至つたのであるが、此の臨終の一喝は實に大切な首と天秤棒の眞劍の一喝で、僧肇法師の滿腹の精神が此の二十字中に結晶して居るのである。

四大とは之を性質上より云へば堅潤煖動、之を形體上より云へば地水火風に於て、今日の科學の術語を假り來れば酸素、水素、炭素、窒素の四元素に相當し、四大といふも四元素と云ふも實質に於ては毫しも異なる所なしである。而して我々人間の身體を始めとして大は天地の大より小は微塵の小に至るまで、何物か此の四大より成立たざるものやある。有機無機動物植物、一切の生物はいづれも悉く此の四大より成立てるものにして、此の四大たるや元

あるに非ず、生死本來空にして、嘗に人空なるのみならず、法も亦空なりと喝破したものである。

地水火風の四大といへども個々獨立しては物を成さず、異性調和してそこに萬物生焉。これは圓覺經中にも詳しく説いてあるが、特に圓覺經を引かずとも、一寸我々の素人考へにしても溢紙に油を塗つたやうな皮膚を始め髮爪の如きものは多く土に歸し、水は全身に涉つて血、膿、汗、膏、涙、鼻汁、唾汁、大小便となり、火は體温となり、風は動の働きにして出づる息、引く息となり、是等の異性相倚り相扶けて、こゝに健全なる身體を組織する事が出来、おめでたい百二十五歳の長壽説を唱へらるゝ次第である。

八 異性調和の美

古歌に「引きよせて結ばば草の庵にてとくれば元の野原なりけり」と云ふのであるが、此の四大を土は土、水は水、火は火、風は風と元へ返せば五尺の身體も誠に埒も絲爪もない物

である。四大元あるに非ずである。然るに凡夫之を會せずして貪瞋痴の五慾煩惱、八萬四千の妄想の爲に我と吾が耿々たる心を味まして、萬劫にも逢ひ難き人生を懷疑煩悶の裡に葬り去るは憐むべきの至極である。人生は無限にあらず、人間は永遠に生くるものにあらずとすれば、四大分離して什麼の處に向つてか去る、其の去る處を知るは人生の眼目ではあるまいか。

人間が猿の後裔子孫で有るか無いかの議論は別問題として、人間は曾て猿や鳥や爬蟲の時代もあり、蟬や子子のやうな時代、複細胞的に入つて鼻目も認められぬやうな時代もあつたのである。諸物自性無し、たゞ因縁に由つて生ずる、彼の燦たる空の星、浩たる海の水地球の廻轉、山の聳ゆる、水の流るゝ、いづれか必然の道理の相具はつて然らざるにあらざる。遠近の原因、内外の原因あり、始めて其處へヒョッコリと姿を現するのである。土や水や火や風やの相異つた物が宛ら同じき物の如くに、恰も一族の者のやうに存在して、そこに大自然は出現す。茲に家庭の團樂、スピートホームに見ても、社會の共同生存の意味に

徴しても、貴賤尊卑貧富強弱相扶けてこゝに社會は進化の理法に叶ひつゝあるに察しても、異性調和の美を認識する事が出来るのである。

九 禪の本領

次に句の五蘊本來空とは、五蘊は五陰とも云ひ、色、受、想、行、識の五で、物質的の物を總括して色とし、之を我が心に受取るを受、感受——感覺するを受と云ひ、之を受けて之を想ふを想、之を想うて之を行ふを行、之を行うて之を識るを識といふのであるが、此の五蘊も亦本來空にして、キラリと抜けば玉散る氷の刃も到底春風を斬る事の出来ない如く、本來空を斬る事は出来ない。サア斬れ〜といくら斬つても斬られないと觀じたる處、これ龍の口に於ける日蓮上人の刀双段々壞と同じく、春風を斬ると云ふ處が最も面白い處である。佛光國師が温州の亂に逢ひ、虜酋の刃を以て頸に加ふるに方り、神色變せず「乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風」との偈を述べられしも此の僧肇

法師の偈の文字に典據する處がある。佛光國師の電光影裏には更に又面白い機鋒を藏して居るが、斯く僧肇といひ佛光國師といひ白刀頭に臨むも泰然自若として動せざるは、これ常に大信心大安心の境界を得つゝありし結果に外ならず、宗教の本領、禪の本領とは畢竟心の力を修養し、心の自由を得るに在り矣、「四大元非有。五蘊本來空。將頭臨白刃。恰似斬春風」とは豈に大丈夫の日夕に愛誦すべき痛快なる一喝にあらすや。

欺かざるは信なり

一 欺かざる心

之を佛教の戒法上から申せば、不妄語戒といふ事になる。自心を欺かず、妄りな言語を發せないといふことは、實に容易ならぬものであるが、此の欺かざる心こそ、吾等の本心本性であつて、その誠の心の發する所がつまり宗教の本義に契當するのである。明治天皇陛下が

目に見えぬ神に通ひて恥ぢざるは

人の心のまことなりけり

と詠ぜられた、此の御製こそ萬代不易の教であると同時に、宗教的大説法ではなからうか。
又、

さしのぼる朝日の如くさわやかに

持たまほしきは心なりけり

とある。かく御製を列擧して畏れ多いことではあるが、猶昔公の作と傳へられて居る。

心だに誠の道にかなひなば

祈らずとも神や守らむ

と、古き歌ながら、何れも吾人の取つて以て心行の龜鑑として仰がねばならぬ大精神である。此の大精神を以てお互の心を磨き行を練るの鏡として行つたならば、日々新にして心の美を發揮することが出来るのである。曾子は且に吾身を三省すると曰はれたが、三度位ではない

時々刻々自己を省察して、本来清浄たる自性に曇りのかゝらぬ様にせなければならぬ。

二 人を鏡とせよ

一體人の心といふものは、刹那々に移り變つて止む時なく、彼れを思ひ此れを思うて繭糸を繰り出す如く連想して行くものであつて、其の移り變りの刹那々々には、必ず自心の光明を覆はれて、外物の爲めに欺かるゝ心が作用き易いものである。多くの人は何時も信仰とか宗教とか云へば、何でも御經や聖書の中にあるものである、お寺や神社へ行かなければ得られぬものである、僧侶に逢うて始めて得られるであると思つて居るが、決してわざわざそんな遠いところに求めずとも自己本心の發露するところ其處に宗教は生きて居るのである。

よもすがら佛の道を求むれば

我が心にぞ尋ね入りぬる

で、奸醜喜悲愛憎に妄動して居る迷心、此の中にチャンと信仰は現はれ、道は存するのである。心は明鏡臺の如く、自心を欺くところがなかつたならば、苦樂淨沈何の憂があらう。太宗皇帝は、

「人は銅を以て鏡となす我は人を以て鏡とす」

と云はれて居るが、實に味はふべきことであると思ふ。人の善悪は直ちに自己の教となる、先方が自分を憎み嫉んで居たならば、夫を敵とせず、自ら彼を救ふと共に自己を反省して行くがよい、其の時己に自己に對する禍ひを免れ得て憂ひを轉じて樂となすことが出来る。蓮月尼の歌に、

宿かさぬ人のつらさを情にて

臘月夜の花の下臥し

といふのがあるが、脚は疲れる、食物は無し、日は暮れかゝるといふ時、宿の無いのも辛いが、宿を貸されぬ辛さは又一入であらう。然しその無情を呷ち、自ら憂苦を増すよりも、宿

を貸さぬも亦情となつて、この臘月夜に色こそ見えぬ香やはかくるゝといふ盛りの花を衾として寝ることが出来たと、心に樂しまば何の苦しみがあらう。悪い人を救ふといふことは佛菩薩の御心である。親は不幸な悴ほど可愛いといふが、佛菩薩も亦惡人ほど慈悲を垂れて救はうとなさる。淨土門で云へば、彌陀の懷に凡夫は抱かれて居る、「善人なほもて猶往生す、況んや惡人をや」と云ふのは、實にその邊の意味である。

三 生死は猶晝夜の如し

吾人は常に生死を以て苦と見て居るが、生死は恰も晝夜の如く、晝は起ち働きて夜は安臥する様なものである。日常の業務に従事して居る所は是れ生の活動であつて、夜々睡眠に入る

は是れ人生の死滅である、生は恰かも舞臺に上演する如く、死は樂屋に安息する様なもので生として樂しむところでもなければ、死として悲しむところでもない。悟り來らば生を悲しみ死を樂しむの時があるかも知れぬが、而し眞の悟りは生死を生死に任すにある。蓋し夜々の安眠は是れ明日の活動を蓄養するもの、一生の死は又更に偉大なる生命を永遠に致さんとする刹那の安息に過ぎないからである。斯くして大宇宙が時間空間に於て無限なるが如く、吾人も亦無限なるものである。此の信念の上に立つて初めて生命の價値、人生の意義は生ずるのである。自己を欺くの心行は、吾人の要求して止まない無限の大生命を實現せしむるに最も障碍となるものである。人が惡夢の爲めに一夜熟睡することが出来なかつた時には、明日の活動に大なる障碍を來すに違ひない。我々の日常に於ける心行も亦同じく、常に邪惡の爲めに妄動して居たならば、決して安樂な而も偉大なる生命を實現する事は出来ない。自心を欺かず、堅き宗教的信仰に生きて居て、初めて無上の大安樂は得られるのである。

四 信用が第一

歐洲戰亂で、列國から我國に軍需品の注文も漸々來た様だが、是等に應じては、粗製濫造をやつて往々我國の信用を失ふ様なことをするが、實に嘆かましいことである。お互個人間の交際上に於ける信用の重大なる事は勿論であるが、此の大なる國際關係に於て斯かる不信用を來たすと云ふことは、雙びなき大和民族の精華を毀損するばかりでなく、我國の皇旗を汚すものである。是れ平常日本民族に宗教心の微弱なることが、此の原因となるもので、大に考へねばならぬことと思ふ。歐洲では今日まで宗教的戰亂が屢々あつたが、是れも宗教の立場としては感心出來ないけれども、宗教信仰の度合が強いと云ふ點から見ると甚だ感服すべきことである。宗教信仰の堅い彼の國人は、凡て何事に於ても堅忍不拔、奮闘努力する活動が充分認められるのである。日本人は一時熱狂的活動はするけれども、堅忍持久の力に乏しいといふ事は、正しく永遠の大生命と云ふことを考へない、つまり宗教的精神の缺乏して

居る事を、最もよく表して居るものであると思ふ。

五 宗教と産業

兎角宗教といへば、何だか世間離れがして、現世の役に立たぬものである。厭世者の信すべきもの、現代に活動せんとする人には、却つて障碍となるものゝ様に考へられて居るが頗でもない了見違ひである。宗教とは前未述べた様に、誠の教である。自己に確固不拔な元氣を涵養し得る教である。誠の心とは宗教心である。故に宗教心無き人ありとせば、實に心が無い人といはねばならぬ。誠なき人が、何を以て今日の煩雜なる社會に立つて行くことが出来るか。宗教は出世間的であると同時に、大に現實的である世間的である。治生産業、皆是れ宗教心の發露するところに基いては完成されるのである。現代社會の渦中に投じて、萬難を忍び事を成就するの元氣は、實に我が宗教的信仰に依つて得たる眞面目なる大勇猛心でなければならぬ。此の大勇猛心は誠心の發動である。吾人若し自己に恥ぢず自己を欺くの心が

一點でもあつたならば、決して社會の表面に立ちて、公々然と活動することは出来ない。虚偽を以て世のならはしであるかの如くいふのは、暗中飛躍を以て一生を太く短かく暮し、而してのたれ死しても更に構はぬといふ愚かな妄言である。實に嘆かしくも亦慙むべき考へではないか。吾人はたとひ臥薪嘗膽の辛さにあらうとも、如何に赤貧の苦に泣かうとも、一點曇りなき清空を仰いで、自心の光明を自覺した時には、實に云ひしれぬ歡喜と大元氣とを感じ得ることであらう。

六 宗教心の發露

斯く宗教なるものは、人に慰安を與へるばかりではなく、處世上最も必要なる活力を涵養せしむるものである。世に英雄豪傑、聖人君子といはれる人達は、大抵貧窮身に迫る家庭に人となつたものが多い。此の人達は自己の中に動かさんとしても動かすことの出来ない堅い信念を包蔵して、社會の事物と闘ひ勝ち得た人である。所が親先祖の遺産に生き安樂に

人となつた者は、社會の何物なるやを知らず我儘な放縱世活をして居るから、自心に少しの落付もなく、ブラ／＼として緊張したところが無い。故に一朝事起つて昨日の榮華は夢と化し、今日の憂目を見る様な事に遭遇すると、今更の如く驚いて悲觀懊惱遂に自己の破滅を來し、再び起つ事の出來ない淺ましい境遇に陥つて終ふのである。斯る事は滅多に無い様なものゝ、事々物々に就き一々審かに點檢して見ると、吾人の一身は實に薄氷の上に坐せる如き状態に在るといふことに氣付くであらう。燒けば灰、費消すれば失くなる家屋財産は勿論、分散すれば影さへ見えぬ四大假和合の身を以て、頼りとし安樂な積りであらうが、有爲轉變は古今の常規である。今日あつて明日なき身命と知らば、頭燃を救ふが如く自性を徹見し、早く大世命を自覺して無限の得果を成就せねばなるまいと思ふ。此の時既に宗教心は發露するのである。然し高大無邊の大精神など云つて何ぞ偉いものゝ様に思はれるかも知れぬが。之を求むるは易々である、曰く唯誠の心を發せ、其處に自己と大宇宙の大精神とは契當するのである。欺かざるの心は吾人の不完全なるものをして、完全圓滿なる無限の大世命に

合致せしむる唯一の大道である。

七 眞個の大信念

人類と云へば全生物中尤も進歩したもの、萬物の靈長だと云ふが、凡ての方面に於て他動物に勝れて居るものではない。人の歩みは馬のそれに及ばず、人の泳ぐも猶魚の泳ぐに勝たぬ。人は精神あるを以て他の動物に勝るといふも、猶禽獸に劣る振舞は社會の到るところで演ぜられて居るではないか。一例を以て云へば、他の動物の生殖作用は自然的であつて決して無理な點は無けれども、人間になるとさうは行かぬ。只社會の制裁を恐れて人間らしくして居る迄である。それで若しその羈絆がなかつたならば何うであらう。落花狼藉實に目も當てられぬ醜行が演ぜられる事であらうと思ふ。實に淺ましい次第である。凡そ人と生れては何等かの意義ある生活を営まねばならぬ。宗教の必要はさういふ點から自然に起つて來るのである。死人を取扱ふのが宗教の天職ではない。少くとも他の動物と違つて、人間らしい人

間にして此の人生を意義あらしめたいといふに外ならぬ。「樂しみは夕顏棚の下涼み」といふ句がある、が實にさうである。たとひ金殿玉樓に住ひ、身を絹や錦の美に纏うて居ても、眞の樂しみは得られるものではない。朝から晩まで汗水流して働いた後、一合の晩酌は何の位慰安とならうか、夫婦共稼ぎ夏の炎天に車を引く時、一樹の下に休息する五分間が、どんなに樂しいであらうか、吾人は如何に碎身の苦があつても、自己心中に堅い／＼信念を抱き、自心を欺かざる誠の道を辿つて居たならば、此の穢土そのまゝが淨土であり、汗垢に汚れし此の身そのまゝが佛身であり、手を垂れ足を擧ぐるも亦是れ佛作佛行であることを自覺するであらう。

報恩の精神

一 中と云ふ意義

近來唱道せられる漢字排斥論には、それ相當の議論もあるが、今日漢字を除去すれば、我國の文學も歴史も淋しくなる。我々が漢字を愛するのは、象形文字であるからのことで、アルハベットの如く記音文字でないからである。漢字は一字一字に面白味がある。一寸絶句を作つて見ても、一字の出入にも多大の感興があるではないか、是は歐米人の知らぬ話だ。忠の字にしても、之を説文的に解釋すると、中と心とであつて文字その者が意義を顯はして居る、我々の心の中正を得た状態が其處に見える。心の中正を得たといふこと、それは色々に應用することが出来る、帝堯が帝舜に天下を譲る時に、「人心惟危、道心惟微」と云はれた。これは勅語といふのか、その勅語は帝堯が夏禹に天下を譲られる際に、「惟精惟一、允執厥

中「の二句を補足された。帝王が國家を讓るにも斯くの如き勅詔を垂れて居る、其處にも中の字の意義が示された、心の精しく心の二つなきことを現はしてある、學者の註は別として、直に此の意義が忠の意義を善く現はして居る。

二 佛教も中の一字

佛教の最終の目的、佛教の本領も這の中の一字にある、中道と云ひ、實相と云ひ加ふるに更に中道實相第一義諦と稱す。これが佛教の極旨である。何が中道實相か、空假中と天台の智者大師はいふ、宇宙を一面より觀れば真空なり、その本體より云へば真空なり、時間的にも空間的にも差別を認めぬ、一味平等、鶴の毛一本もない、真空其の體が空である。有るものを擯けて空なのでない。日月星辰山河大地草木國土、存在した儘その儘真空なのである。それを除けずに真空なのである、法は法位に住して真空なのである。一切の現象を其の儘存して真空なのである。それ程真空なのに何故に差別相が現はれて居るか、因果の理法の上に

「鳶飛戻天、魚躍ニ于淵」偶然でなく、情乎でなく、總て因果の理法に隨つて天真爛漫に現はれる、本來は畢竟空なれども現象からは假に現はれて居る、固有的に現はれるのではない。「無しと見てあるは常なり水の月」と云ふ俳句がある。空諦から眺めたのである、假諦から「ありと見てなきは常なり水の月」と裏返して宜しい、両面から眺めて兩様に觀て、根本を失はぬ。これは相兼ねて隔てがないからである。宇宙は有とも無とも思へる、有非有、空非空、同時に亦空亦有、此處に中道諦を立てる、智者大師の三觀、空觀、假觀、中道觀、總て相兼ねたのを中道實相第一義諦を涅槃とも菩提とも不二ともいふ。中道の異名は澤山ある萬機萬境に對して其の名を同じくせぬ、要するに佛教の中心點これである。

三 たゞ忠の一字

忠と云ふのは差別界の中道を得て居ること、中諦の一半である。これは出世間門の話であるが、世間門にして見れば、忠は抽象的哲學の學說でなく、其の意味を世間に働かせて事

實にする、それが倫理の根本、實行道徳の起源となる。三綱五常といふ其心は何か名は違つても忠の一字に外ならぬ。子に孝といふも發する所は忠である。親は慈といふも發する所は忠である。兄弟に友といふも發する所は忠である。朋友に信といふも發する所は忠である。相對の關係により名が變るが、畢竟して忠の働きである。特に忠の一字は我國にあつて著しく外國と意味を異にした獨趣を有して居る。獨趣は即ち忠孝一致の精神である。儒教佛教が我國へ來ない以前に於て、既に大和民族に特發した精神であつて、文字は支那から來て、それを借りて云ふにもせよ、文字に依つて出來たものではない。支那では忠孝一致しない場合がある、伏羲、神農、黃帝、堯舜と朝を異にし、夏殷周より屢々革命して二十四朝を算へ國は一個でも朝を變へた、最近の清朝は中華民國となり、民國を帝國となすとかなさぬとか云つて、大動亂を惹起した位ではないか。支那に固有する孔孟の教があつて、勢ひ忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならざる場合があつて、忠孝一致でない。權力爭奪の結果で朝を替へる、子孫の忠ならんとする所は祖先の敵であるかも知れぬ、祖先の志の如

くせねば孝ではなす。

四 忠孝一致

大和民族獨趣の教旨は忠が孝になり、孝が忠になる、忠孝一致の處にある。最近の勅語に「義は君臣にして情は父子の如し」とある。忠を勵めば皇室國家に對して孝になる、表が忠裏が孝、表裏一個になる。我國が二千五百餘年、東海の表に屹立したる最大原因は、此の忠孝一致の精神である。總て知識學問よりするもの、乃至農業商業工業美術、何も彼も一切が忠孝一致の精神の上に立てられた建築物である。それが開國進取の鴻謨によつて、維新以前は消極的に働き、今日は積極的に働く、愈々祖宗の皇猷を擴大充實することになつた。これは慥なる事實で歴史から證明される。列強以上に萬國に向つて、我が大和民族の光を輝かすことは、忠孝一致の精神を鞭撻激勵するにある、然らば我國の前途は洋々として春の海の如きものである。

五 報恩の精神

若し國民の一人が此の心を弛めれば、それだけ我國が衰へる、二人此の心を弛めれば、それだけ餘分に我國が衰へる、鞭撻激勵して毫も弛緩なく、何處までも此の精神で行かなければならぬ。現在の學術は最新中の新、珍中の珍を取り、其他の文物百般、大膽に受用して宜しいが、唯だ此の精神を地盤とするならば、何等の文明も決して日本の精神を衰頽させぬ。要するに忠は下たる者が上に對するのみならず、上が下に向つても亦これあり、我が日本は忠の一字を以て道德の根本として國家の基礎と見て行かねばならぬ。之を佛教の教理に照して見ても更に違背しない。四恩というて國王の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩、對機に約して名を異にするが、報恩の精神は一つで二つはない、それは忠である。忠を報恩の精神だと云へば舊く聞へ、博愛の精神だと云へば新らしく響く、那個這個にして同じで、名に牽かれて徒らに惑ふことはない、報恩の精神、博愛の精神、それは翻手覆手の差に過ぎぬ。

人としての修養

一 修養の意義

扱て納は、諸君に對して始めから佛に歸依せよとか、佛を信ぜよと云ふ事は決して申さぬ。勿論それは必要である、必要ではあるが、今此處では、たゞ廣い意味に於ける精神の修養——孔子にあれ、孟子にあれ、基督、マホメット、何物をも擇ばず、苟くも品性を陶冶し、人格を向上せしむるに値する所のものは、皆取つて以て我が藥籠中のものとし、以て精神の修養に資すると云ふ立場からお話を致さうと思ふ。

修養とは今更に改めて文字の解釋を施すまでもなく、修め養ふ事で、諺にも「桃栗三年柿八年」と謂つて、桃や栗を得るには、三年間の培養を要し、柿は八年間の星霜を経て實を結ぶものである。のみならず凡そ天地の間に現はれて居る一切萬物は、皆原因あり結果あり、

一絲亂れず整然としてこれは縦、これは横と、源織り上げられて、複雑極り無き現象となつて顯れて居る。然れば何れにしても其が大切である。我々が立派なる人格、美はしき品性を完成せんとするには、片時の間も其の源たる精神の修養を忘れてはならぬ。

二 日曜は宗教日

衲は只今、其修養の説を兼ねて、諸君は常に致々汲々として、國家の爲め、社會の爲め、怠らず働いて居られる、故に又之を慰安するの必要が大いにある事と思ふ。歐米各國に行つて見れば、如何に彼等が精神の修養、精神の慰安に心を傾けて居るか、窺はれる、彼の地では一週間に一度は、必ず寺院又は宗教上の室——大工場等には宗教上の室の設備がある——に往つて命の洗濯をする。それは佛教と云はず、耶蘇教と云はず、すべてがさうである、吾が一週間自利利他の職務の爲に働いて居れば、何時の間にか袂塵が溜るやうに、知らず識らずの内に我々の心が汚れて来る、そこで日曜毎に之れを洗濯して、精神の修養をなすので

ある。

英國のエヂンバラに行けば、日曜には日常缺くことが出来ぬ交通機關の電車までも止めて、寺院に行く、東京人の如く淺草に行つて活動を見るときか、上野の動物園に行くとか云ふ事は決して出来ぬ、是非とも皆お寺へ行かねばならぬ。日本では電車までも止めると云ふ事は出来ぬが、兎に角、外國では何故それ程までもして宗教が尊ばれるのであらうか、此れは云ふ迄もなく吾々の心の基礎である。心の自由である、自由中の大自由であるからである。今我國上下の思想が宗教そのものに對して那邊に存するかは衲には分らないが、大體さういふ意味で人としての修養を述べようと思ふのである。

三 天職に興味を持って

衲は如何に労働者に相對して、俗に云ふ職人であるとは決して思はない。他日立派なる紳士となり、立派なる令夫人と成られる方々である。何故なれば其人々の胸中には「今に見よ

今に見よ」との勇猛なる、熱烈なる精神が絶えず充溢して居る。しかも之を抑へんと欲しても到底抑へ切れ無いに違ひない、果して然らば、其人々は今給料を得んが爲め働いて居るのでは無い、勿論働くから給料を得るに相違ないが、給料を得ようとして働くのでは無い、若し給料の爲めに働くとせんか、假りに其人々の日給を五十錢とすれば、其人々は僅か五十錢の人間と値付けらるゝ事となつて仕舞ふ、それでは萬物の靈長たる人間として甚だ情ない話ではないか。されば今働いて居るのは他日の第一歩「今に見よ、今に見よ」と云つて居る、其今に來らんとする他日の第一歩を築き上げつゝあるのである。既に他日の第一歩として働いて居るとすれば、其處は工場たると同時に又學校である。小學校、中學校、大學校、其他種々様々な學校はあるが、其等は極めて狭い範圍の學校で、廣い意味で學校と云へば、其の工場、此れが直ちに一つの學校でならねばならぬ。斯くて其中の人は今働きて居る、其處に又一つの教育を受けつゝある。若し教育とは善良なる人間を作る事を意味するとすれば、工場に働く間にも又人格を向上せしめつゝあるのである、此の如く觀じ來れば、働く事それ自

身に津々たる趣味の溢るゝの感ぜずには居られない。總て人生には趣味と云ふ事が必要である、毎日納豆〜と呼び歩く納豆賣も、それを自己の天職として之れに従へば、前と同じ理由の下に於て又味ふべき趣味が其處に生ずるのであらうと思ふ。

四 治生産業佛法と違背せず

斯うなつて來れば、車夫が車を曳き、鼻緒屋がハナ緒を上げるのも、皆神聖なる事となり所謂労働は神聖である。労働は神聖なりと云ふ語は近來の流行の様であるが、我が佛教では幾百年の昔から既に之を教へ、之を奨励して居る。神聖と云ふ事は決して議論や理窟ではない。

試みに眼を擧げて天地自然を觀すれば、天地自然は常に何事を吾人に啓示して居るか、天高きが故に自ら尊しとせず、地低きが故に自ら卑しとせず、高きは高き儘、低きは低き儘、何の不平もなく何んの不満もない、彼等は曾て我は低き處にあつて働くのは厭だと云つた例

しがあるか、決して無い。仰げば日月星辰、伏せば山川草木、森々羅列せる一切の萬象、秩序整然と各々其分を守つて居るではないか。斯くて人に愛翫せらるゝ庭木にも路傍に蹂躪らるゝ草葉にも、等しく天地自然の精氣は宿つて居る、獨り榮華に誇つたソロモンの花ばかりでは無い、無名の一莖草にも佛の御命は宿ると言はれて居る。汗を流して働く此工場も學校であり、人格修養の道場である。勞働は神聖であるとの意味を前に述べたが、之は今更ら衲が事新らしく云ふのでは無い「法華經」の中には「治生産業佛法と違背せず」とあつて、政治家が政治を執り、實業家が實業に従事し、軍人が鐵砲を擔ぎ、漁夫が海を漁り、樵夫が山に樵るのも、皆己れの天職であるとすれば、皆偉大なる宗教的の修養、宗教的の行持となる。茲に至れば、

面白や散る楓葉も咲く花も

おのづからなる法の御姿

となつて顯はれぬものは一物もないのである。

五 精神上に錦を飾れ

斯くの如くなつて來れば、此處に人間一人ありとすれば、其人は必ず何事かをなして居る、それは即ち精神の修養である。昔京都三條の橋を我家となし、其下に住んで居る父子三人の乞食があつた。或時「下に居れ、下に居れ」と威風堂々と橋の上を通る大名の行列を見たる兄の乞食が「あゝ、あの豪奢を極むる大名も、缺椀持つて人の門邊を徨ふ吾々も同じ人間ではないか、吾々も籠の中の大名とまでは成れずとも、切めては其の行列になりとも加はる様に成りたいものだ」と切りに他人の富貴を羨んで居た。之れを見た弟の乞食は「兄さん、それは間違つて居ませう、今吾々は人を羨まうよりは先づ自分共の幸福を歡ばねばなりません、位置貴ければ敵も多く、財産多ければ泥棒の恐れも亦従つて多い、然るに今吾々は殺される憂もなければ、盗まれる心配もなく、しかも飢ゑも凍えもせず、其日を送るとは何と安樂な身の上ではありませんか」と云つた。所が傍に衣を被つて寝て居た父の乞食がムクムクと起

き上つて「そんな安樂な身の上になつたのは誰の御蔭だ……山よりも高き親の恩を忘れるな」と云つたといふ話がある。事實は兎に角、精神上「足る事を知る」といふ事があれば、たとひ其身は乞食——乞食は甚だ宜しくないが——をして居ても、其處に心の満足と安心とは存するものである。みだりに人を羨んではならぬ。世の中には筆の先や口の先で胡魔化し大度高樓に住み錦繡を身に着け、自働車や馬車を奔らせ、豪い顔して良民に對する背徳の人が全く無いとは限らない。たとひ其身には襤褸を纏ひ、穢ろしき裏屋に住んで居ても、願はくば精神上に錦を飾らんと心の掛けさへあれば、其人は必ず幸福に一生を終へる事が出来る。

六 努力が修養

經濟と道徳即ち精神の修養とは相伴つて決して二つに分つべきものでない。況んや人生五十、七十は古來稀なりてふ短い人生を、これだけが精神修養と分けては居らない。諸君は毎日働いて居らるゝ、その働く事が直ちに修養だとすれば、一つの時間を二重に使へる事とな

るではないか、兎に角、前述の如く日々の仕事をする事が、取りも直さず己を磨く事だと、確かりと心に定めて、傍目を振らず働くのが肝要である。

昔支那に容貌が至つて醜い一人の娘が居た。今日の日本の言葉で云つたら、まア「オコバさん」とでも云ふ事になるだらう。所が或時齊國の王様が全國を巡守せられたので、沿道の人民は到る處皆仕事を捨て、老若男女を問はず堵をなして其行列を拜んだ。然るに此處に只一人振向いて見ようとせず、セツ／＼と桑を摘んで居る瘤の娘が一人ある。之を見た王様は直ちに家來に命じて之を呼び寄せられた。その娘は恐る／＼國王の前に出ると、王様は「斯やうに人々は林の如く群がつて、我が通るのを見るに、殊に珍しいものを見たがる年頃なるにも拘はらず、見ようとし無いのは見たく無いか」と問はれた。宿瘤は「拜みたく無い事は決してありませんが、今朝母から桑を摘めと命ぜられました。王様の行列を拜めとは命ぜられません、それで行列は拜まずに桑を摘んで居るので御坐います」と答へた、これは只一端であるが、斯くの如く萬事萬端に對して、此れが自己の天職であるとすれば、一家庭

にあつては賢母良妻となり、社會の事業に携はりては、其物の女王となる事が出来る。そこで王様は「是れは此上なき精神上の美人である」と云つて直ちに妃に迎へられたと云ふ事である。「積善の家には餘慶あり」で、此の娘は玉の輿に乘らうなど云ふ野心は少しも無かつたが、たゞ其の心掛け一つで玉の輿に乗り得たのである。天の祐もあつたかも知れぬが、然し「天は自ら助くるものを助く」るので、天は決して偶然に人を祐くるものではない。要するに、諸君が日々仕事をして居るのは學校に行つて居るのである。精神の修養をして居るのであるとの心さへ確でさへあれば、他日は自ら立派な紳士となり立派なる令夫人となる事は決して疑ひない事である。であるから常に之を心に銘じて、各自の職務に勉勵せられん事を特に諸君に御願ひ致して置く次第である。

向上の一路

向上とは他なし、眞理の大寶藏に向つて進むことである。それには其の障礙となつて道に

横たはる邪魔物を破らねばならぬ。之を破るには専ら修養の力に依らねばならぬのである。一滴の水もタラ／＼と幾久しく落ちて居るうちには大盤石の巖をさへ徹して、之に大きな孔をすらあけてしまふ。故に修養に積むに修養を以てすれば、遂には眞理の道に進むに邪魔物を打破つて其の寶藏に達する坦々たる大道を發見し得るに至るものである。この大道が即ち向上の一路である。

却説、眞理に達する大道の障礙となる頑鐵の垣を破るには、いろ／＼さまざまの道具を要するのであるが、その道具の使用法を研究工夫する事を、修養と申すのである。その道具にも、種類はさまざまあるであらうが、茲には納が見て最も重要なりとするところのものを六つばかり擧げて、青年諸子の爲めに誠を説くことに致さう。即ち(第一)が艱難(第二)が悔悟(第三)が信仰(第四)が博愛(第五)が感謝(第六)が希望である。

第一 艱難

西洋の諺にも「逆境は人を作る」といふ語がある。支那にも古くから「艱難汝を璞にす」……申す諺がある。人は山海の珍味佳肴に飽き、金殿玉樓に棲み、手を拍けば奴僕唯々として其前に趨せ来るが如き順境にある者は、幸福よ仕合者よと稱び、斯る安樂な境遇にある者を羨ましく思ふやも知れぬが、斯る順境にある人々は、其實誠に氣の毒な者共で、是等の人は眞理の寶藏に達する大道を發見する前に早く先づ己が順境によつて殺されてしまふものだ。昔から「馬鹿殿様」といふ熟語のあるほどで、殿様の如き順適の境涯にあれば、人は大抵皆馬鹿になつてしまふものである。順境にあつて猶ほ怠けぬ如き人は餘程の達人である。逆境にあつて、この逆境に打ち勝たうと努める處に力が生じ、之によつて青年は眞理の寶藏に達する向上の一路を遮る頑鐵の垣を破り得られるのだ。孤兒であるとか、貧乏な家に育つたとかいふ事は、決して青年の不幸で無くて寧ろ大なる幸福である。富貴榮華は人を瓦にするが、艱難は人を璞にする。慈悲深い親の温かい懐に抱かれることも出來ず、三飯にさへ粥を吸つて暮らさねばならぬ不自由な境涯に生れた人は、之を不仕合だなどと思つては

ならぬ。これほどの仕合せは死んでも到底も得られぬものだと考へて、衷心より皇天佛陀に感謝して然るべきである。斯る逆境に立ちながら、什麼かして之より脱け出したいものだ、他人の世話にならずに暮らせる身分になりたいものだ、憤發興起する間に、青年は豪くなるのである。世界の知識と平和との増進に既に數億の富をすら寄附したと稱せらるゝカーネギーも、素は石炭擔ぎから身を起したもので、艱難を忍んであらゆる障碍を打破り、一向専念、向上の一路を驀然に眞理の寶藏に向つて進み、富を得て之によりて我が理想を實現せんとしたばかりに、今日カーネギーたるを得たのである。

國家とても亦然りだ。敵國外患なければ國は却て危くなるものである。日本の今日あるは日清戦争の大艱難に能く耐へ、三國干渉のあつた時にも能く之に堪へ、十年臥薪嘗膽の苦を積み、日露戦争の國事多端にも堪へ、遂に日獨戦争となり、昨今の如き國運の興隆と素晴らしい景氣とを見るに至つたのであるが、日本の進歩發達の爲めには、今日までの逆境が悉く藥になつたのである。しかし、今日是从の順境が却つて國家百年の災ひを醸す縁に

ならぬとも限らぬ。是れが寧ろ心配である。

第二 悔 悟

孔子は論語のうちに「過つては則ち改むるに憚ること勿れ」と説かれて居る。人には無論過失のあるものだが、過失と知つたら之を改むる氣になりさへすれば、再び眞理の寶藏に向つて進む大道に立ち歸り、向上を續けて行き得られるが、什麼も遺憾ながら大抵の人には我慢心といふものがあつて、如何に過失を知つても「參つた」と直ぐ頭を下げてしまはず「ナニ、ヤツつける」と謂つたやうな調子で、我が過失を遂げようとする。悔悟すれば、人間が小さくなりでもするかのやうに考へ違へて、そこに瘡我慢を發揮し「おれは是れで可いのだ」と威張り散らしたがる者が多く、飄然として悔悟し、眞理に向ふ大道に歸つて進まうとの氣を起す者が少い。此點が人物の大小の依つて以て別るところの分岐點で、大きな人物は飄然悔悟して大道に歸るが、小さな人物は自分の非を遂げて益々横徑に深入りし、遂に罪

業の雲霧に包まれて眞理の光明を認め得られぬやうになつてしまふものだ。あらゆる罪惡は己れを偽り我が非を非とせず罪に罪を重ねて之を遂げようとするより發するものだ。されば佛典「傳燈錄」にも、

一切業障海。皆自妄想生。若人欲ニ懺悔ニ端坐念ニ實相。衆罪如ニ霜露。慧日能清除。

(一切業障の海は皆な妄想より生ず。若し人懺悔せんと欲せば端坐して實相を念ぜよ。

衆罪は霜露の如く慧日能く消除す)

とある。苟も、自主自尊、自我の魂を尊しとする大我慢心のある青年ならば、飄然悔悟するを恥辱なりと心得るが如き瘡我慢の妄想を棄て、眞理に向つて進むべき向上の一路より離れぬやうにと心懸け、我非を自ら飾つて之を遂げんとする如き淺薄な思想を起してはならぬものだ。我が非を知つて之を遂げ、以て自ら豪しとする如き青年は、智慧の足らぬ男である。過失を知れば直に飄然悔悟し、之を改むるに憚る處なく、端坐して人生の眞意義を考へる如き人で無ければ、到底大事を爲すの資格無く、天下の鴻業を遂げ得られるもので無い。悔悟

は人の人格を大きくするものだ。

第三 信 仰

水の流れを越ゆるには、舟筏を借らねばならぬが、人の生涯は淨瑠璃の文句にも「水の流れと人の身の……」とある通りで、生死の流れである。この生死の流れを渡るに要する舟筏は、是れ信仰である。信仰無くしてなほ世渡りを致すことの出来るものと心得るのは、舟筏なくして水の流れを渡らうとするのも同じで、輕舉無謀の極といはねばならぬ。

一般俗人には、信仰は人に慰安を與へ、人の氣休めになるものとせられて居るが、信仰は單に慰安になつたり氣休めになるばかりのもので無い。大なる力となり人をして活動せしむる大動力となるものだ。信仰を得た人は、之を譬ふれば餓えたる者の食を得たるにも等しく信仰は人に勇氣と活氣とを與へ、之をして獅子奮進の勢ひを振ひ起すに至らしむるものである。眞理に達する向上の一路を驀然に進まんとする青年に若し信仰が無ければ、途中の障壁

たる頑鐵の垣を破り得るまでの大なる力は得られるもので無い。されば獨逸の詩人ゲーテは「信仰はあらゆる知識の極度である」とさへ申して居る。知識の行き詰りになつてしまつた場合にも、なほ眼前に横たはる鐵壁を打ち破つて眞理の寶藏に突進する力と智慧とを人に與ふるものは實に信仰である。されば、佛教では信仰を稱して、一に大覺とも謂ひ、この大覺を得た人を覺者即ち佛陀と頌へて之を崇めるのだ。大覺とは平たく謂へばサトリであるが、自覺、覺他の二つを遂げて覺業圓滿の境地に入つたものが是れ即ち佛陀で、佛陀になつた人には信仰によつて眞理を徹見する力があるから、決して知識が行き詰りになつてしまはぬのである。向上の一路を進まんとする青年に、信仰を要する所以のものは實に茲に在る矣。

信仰は如何にもゲーテの語にある如く、知識の極度であるに相違ないが、同時に又知識の端緒である。實驗を主とし、空想を排斥する今日の科學的研究法に於ても、その基礎となるものは實に信仰で、信仰が無くつては、辨異統同を行ひ得られるものでも無ければ、歸納も推理も批判も到底出来るもので無い。また富貴も淫する能はず貧賤も移す能はざる道德的大

勇猛心も信仰によつて初めて之を得らるゝものである。さて斯る不思議の功德ある信仰は何によつて得らるゝかといふに、それは宗教である。宗旨の如何の如きは、敢て問ふ處で無い。この意味に於て納は、青年に宗教を勧める。

第四博愛

「四海同胞」とか或は又「人間は皆な共に神の子である」とかいふ語は、世界の到る處に持つて囃されて居るのみならず、人類は悉く平等のもので、人種の差によつて其間に差別を設くべきもので無い、なぞとの説さへ唱へられもするが、さて實際問題に接觸して見ると、なかなかさう議論通りには旨く行かず、兄弟ですら尙ほ壁に闘ぎ、人が人を殺し合つて平和の世界であるべき筈の斯の天地が、阿修羅道に化せられてしまつて、歐洲には、且て殷々たる砲聲轟きわたり、到るところ是れ血の泉、屍の山であつた。

昔の如く文明の簡單なる時代には、慈悲も能く普く行き渡るを得たが、昨今の如き複雑な

る文明の時代には、電車に一つ乗らうとするにも、人は皆な戰鬥的態度を取り他人の迷惑にも拘はらず、遮二無二に押し込んで這入らねばならぬやうになつてしまつて居る。汽車なんかに乗つて見ると、僅かに一人分の賃金を拂つたのみで、三人分ぐらゐの座席を横領し、他の人が寄り附かうとすれば、狂水病に罹つた犬のやうな顔をして、睨みつきさうにするものさへある。しかし斯んな事では世の中の前途が案じられる。蒸汽船が今日の如く行はれぬ頃には、乗合船といふものがあつて、老若男女が芋を洗ふ時のやうに、一つの船にゴツチヤに乗り合ひ、大阪から伏見などへ淀川を上つたり下つたりなぞしたものだ。この種の乗合船では、食物を賣る者が船の中にあつて、果物だとか菓子だとか辨當だとかを乗合客の間に持つて廻り「食はんか」と觸れ歩くのが例であつたので、乗合船の事を、當時一名「食はんか船」とも稱んだものである。

常盤津か何かの踊に「乗合船」といふ一曲があつて、正月の芝居などに能く上演されるが、あれを見ると乗合船のお客には、葎の頭もあれば若旦那もあり、白酒賣も出れば萬歳も

現れ、藝者もあれば店の若い衆もある。乗客の種類は實に千差萬別だ。この世の中は、丁度「食はんか船」か此の乗合船のやうなもので、老若男女の乗合である。自分ばかりが獨り力で、乗合の他の客に迷惑となるのも厭はず、勝手我儘な舉動ばかりをしたのでは、到底も納まりがつかず、人は誰でも皆な平和に其日を送り得られ無くなる。旅は道伴れ世は情で如何に青年が勇猛精進して向上の一路を辿り眞理の寶藏に到達しようとしても、自分一人だけでは容易に其の障壁たる頑鐵の垣を破り得られぬものである。世の中の老若男女が互に相助け合ひ力になり合つて行く間に、大なる力が生じて來るので、博愛の人に必要なる所以は實に茲にある。博愛とは他なし他に臨むに慈悲を以てし、拔苦與樂の精神を忘れぬことで、人に博愛の精神がありさへすれば、この騒がしい世の中も靜になるが、博愛心は宗教によつて信仰を得さへすれば、その下に自づと生ずるやうになるものである。然るに宗教の行はるゝ歐洲に今日の如き阿修羅道を現出するに至つたのは、歐洲に行はれた宗教の行き方に間違つた所があつたからで、恐らく歐洲の戦争が濟んだら、歐洲の宗教界にも一大革命が來るであらう。

第五 感謝

如何に力があつても勇氣があつても、心に愉快がなければ人は向上の一路を驀然にあらゆる障碍を排し、眞理の寶藏目がけて一心不亂に突進し得られるものでない。希臘の神話に、神様たちがアルゴと稱せらるゝ五十人漕の船に乗り合つて金毛探險の爲に出帆するが、海上で船が二進も三進も動かなくなつてしまつたところを、乗合のうちに名をオルフォイスと稱ぶ音楽の神様があつて、提琴を奏したので、船が又動き出したといふ傳説がある。人の一生も丁度そんなもので、如何に世間と和合し博愛の精神を以て世の中を渡らうとしても、心中に愉快が全く無いやうでは、一日を暮らすにも骨の折れるほどなものである。年少血氣の青年とても亦然りである。

愉快に其日を送るには、敢て絃歌を聞き酒地肉林に遊ぶ必要はない。顔回の如く一簞の食

一瓢の飲、陋巷のうちに起臥しても、心の持ちやう一つで無限の愉快を其の間に味ひ得られるものである。それには感謝といふ事が必要である——如何なる事が降り掛つて來、如何なる境遇に臨んでも、感謝して之を迎へ之に接しさへすれば、人は皆な愉快に其日を送り得られる。一枚の衣でも身に纏ひ得らるれば、之を一枚の衣だに無きものに比し、實に有難い仕合な身分であると思つて感謝するがよい。召使の女が茶を一つ運んでくれても、誠に有難い至りだと感謝の情を湛へて之を受ければ、持つて來てくれた當人も愉快なれば其茶を飲む自分も亦愉快を覺える。如何に酒池肉林に遊び美しい絃歌の聲を耳にして居つても、自分の境遇位置に不平不満を抱き、他人の爲ること作す事が悉く癢に障つてムシヤクシヤし、柳家小さんの得意とする「小言幸兵衛」の落語にでもあるやうに、朝から晩まで小言の云ひ續けで自分の不愉快は素よりあたり近所の迷惑苦痛も一通りや二通りでは済まぬ事になる。他人に對して不平を懷き自分の位置境遇を悲觀して愚痴を零して見たところで何の役にも立たぬ。徒らに不愉快を重ね勇氣を鈍らすばかりである。青年は須らく愚痴を零さず如何な

る境遇事情にも感謝して接し、之を皆自分を切磋してくる恩人なりと考へ、有難く禮を述べて之を處すべきものである。然らば、いつ何時死なねばならぬやうな目に遭遇しても、毫も怨恨を後生に残さず、泰然として極樂往生を遂げ得られるのである。

第六 希望

また人をして愉快ならしむるものは、感謝の外に希望がある。青年が如何なる鐵壁をも打破り、眞理の大寶藏に向つて驀然に進み得らるゝのは、一つの希望を達しても亦新たな希望を生じ、希望が次々と現はれて來て、絶えず連續せる理想を懷いて居られるからこのこと人に理想が無くなつてしまへば、その人には又進歩が無くなつてしまふやうになる。

如何なる逆境に立つても、青年に前途の理想あり、赫灼たる希望の光明に照らされてさへ居れば、苦も苦とも思はず勞を勞とも感ぜず、一歩々に進歩を續けて向上の一路を辿り、遂には眞理の大寶藏に没入し得られることになる。希望だにあれば如何に周圍より迫害排擠

せられても、皆な是れ自分を璞にしてくれる他山の石なりと考へ、之を我が修養の道具に使ひ得られる。他人が悪意を以て我れに向つて來ても之を善意に解し、他人が鬼の態度で襲うて來ても、之に接するに佛陀の心を以てし得らるゝやうになるのは、一に希望の力である。古歌に、

人を皆な吉野の花と思ひ見よ

我を難波のあしといふとも

との一首がある。如何に世間から罵り嘲けられても我に希望さへあれば、他人の放つ罵詈雑言は、之を吉野の花の如く美しいものと見て、悠々迫らず、長閑に愉快なる生活を営み得られるものである。希望は人を此世からなる極樂淨土に導く光明である。青年が向上の一路を辿つて進むに當り、絶えず希望を眼前に描くの忘れぬやうにするのは是れ人生を愉快に暮らす所以で、希望が無くなれば青年の進歩は全く停止つてしまふものである。

力用の意義

一 修養の第一歩

昔、支那の趙州和尚は「汝等諸人は十二時中に使ひ得られ、我は唯十二時中を使ひ得たり」と云はれたが、大概の人は時間に追ひ廻されて居る、忙はしくて堪らんと云うて、心に一寸の餘裕がない。他の意味から言へば仕事をしただけの功がないと言つてもよい。所が修養の出來てる人ならば自分で時間を使つて行く。今迄は物に使はれて居たが、今度は物を使ふといふ大なる力になるのである。一口に動くと言ふても、原動的と被動的との違ひがある。夫故に我々は朝から晩まで時に使はれずして、時を使つて行く事を工夫せねばならぬ、是れが修養の第一歩である。

修養の方法も種々あるであらうが、要するにお互に人の見て居る所であつても見て居らぬ

所であつても、天に恥ぢず、人に恥ぢざるは勿論、自分自身に恥ぢぬといふ心を持つて居らねばならぬ。即ち暗室の中に居ても、自分を欺かないと云ふ精神がなければならぬ。さういふ精神は何處から出て來るか云へば、取りも直さず宗教的信仰より出づるのである。而して之を得るには、自分の心の本體が神とも佛とも變らぬものであると云ふ事を自覺しなければならぬ。

二 力とは何ぞや

人は精神の安立が出来ないと眞の勇氣がない。眞の勇氣がないと自己の力を充分に用ひる事は出来ぬのである。よつて力用の二字について少しく述べようと思ふのであるが、力用と云ふ熟字は今日普通世間では殆ど使用せられない文字であるが、此の熟字は白隠禪師の高足東嶺和尚が著はされた「宗門無盡燈論」の第五版か六版かに説かれてある。併し衲は其の説かれてある内容を、今其儘に紹介するのではない、單に其の大意を藉り來つて、聊か自説を

述べんと欲するのである。

單に力と云うても、種々の意味があつて、彼の物理上では立派な力學といふ學説になるであらう。又之を精神上より解釋すれば、種々に分れて、説明が一朝一夕に盡きるものではない。然れども衲はそれを述べる事は他日に譲り、今は専門上の應用に止めて置くのである。さて其力とは何を意味するのであるかとならば、それは物なり心なりの命であつて、力は即ち生命なりと言つても敢て誤つては居まいと思ふ。天地間に於ける森羅萬象の表現は力で、生命運用自在力のハタラキと云ふ意ではなく、力即ち用と云ふのである。

三 與奪縱横の機略

然らば我が禪宗なるものは、何の土臺に立脚して居るかとならば、今日佛教は十三宗五十六派に分れて居るが、それが悉く立教開宗の根據あつてしか分れたもので、各々立場がある。然るに我が禪宗には立場と云ふものは更になのである。吾宗には言句なく、更に一法の施

すべき何物もないのである。若し有りといはゞ、各自が持つて居らるゝ消極的のものであつて、禪宗なるものは積極的に諸子に差上げるものは何もないのである。更に一步を進めていはゞ、釋迦如來の糟粕を嘗めて居る所依の經がないのであつて、開悟せる釋迦如來が、四十九年三百餘會の説法をば「四十九年一字不説」即ち四十九年間一字も説かずと仰せられてある。此意味を與へて云ふならば、佛乃至祖師の説、乃至彼の白隱禪師のホコリタ、キ、蘇東坡の所謂る、

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何舉示人。

溪聲便是廣長舌、此頃の雨に圓覺寺邊の溪聲が、ザア〜と説法して居る、而して山色豈非清淨身、實に山色を觀じ來れば此の感がある。或は曉方の納豆々々の賣聲も、活動寫眞の騒擾しい叫び聲も、皆これ佛説ならざるはない。もつと徹底的に言ふならば、我々が東京へ出て來て宿屋へ着いて居ると、時々見聞する夫婦喧嘩も亦佛説である。

四 精神の力

かく説き來れば、禪意を説いて却つて不明に導き去るやうであるが、何も不明なのが禪の専門ではない。要するに禪は、力で工夫し、力で發展し、押し擴めて行くもので、之を世間に當てゝ見るならば、智仁勇、佛敎では戒定慧の三法になつて、之が恰も鼎足をなして居るやうなものである。然れども各々更に専門があつて、各宗各派に分れて來たが、禪は力で意志の力に重きを置くのである。而もそれは元來持つて居る心の力を養成するのである。而して眼耳鼻舌心意の力に各々専門がある。禪宗は、腹の力、膺の力で、昔の人は、松風を膺で聞くと云つたものであるが、これ即ち禪は心の力を養成する意味に外ならぬ。或る婆さんが、禪宗坊主を供養すると、禪僧は遠慮なしにウンと食つた。すると其の婆さんは「此坊さんは牛のやうによく食ふ」と云つた。之も禪は膺や腹で養成するからとて何も大飯を食ふのが禪の修行ではない。要するに禪宗は、精心の力を養成する勇往邁進を養成するものである。今

日の我が日本國民、大和民族の力は此の偉大なる勇氣の發現したものである。武士道の勇氣は、——匹夫の小勇は別物であるが——禪の勇氣と、大和民族固有の勇氣とが、鎌倉時代に於ては、彼此、賓か主か、差別ない程であつた。衲は參禪の士に對しては、先づ宗教の何物かを知り、佛教を知り自己を語る杯の事は何であるといふ事を先づ考へて貰ふ。即ち先づ自己の脚痕下を照らして以て入門一步の注意として居るのである。

五 本末を顛倒する勿れ

然るに、近來は若い書生さんが遠方の拙僧を訪れて「私は意志薄弱で困る。忍耐力を養ふ爲めに參禪したいのだ」杯と途方もない意氣地のない事を云つて來る。そんな不眠症や、無氣力の病人などは態々御苦勞千萬に拙僧の所まで尋ねなくても、近所の醫者に乞ふなり靜坐法でもやれば澤山である。我が禪家に於てはそんなものをやるのが目的ではない、よく自己を反省する、そして力を養成するのが主眼である。佛の仰せに、兒は泣くを以て力とする。

兒の泣くのは何とも困るものであるが、女は怒るを以て力とする、彼の百戰の闘士漢の項羽も、一度虞美人に膝下でメソ／＼泣かれては如何せん術も無かつたと云ふ。故に儒教では女子と小兒は養ひ難しというて居る。儒佛は婦人方に對してひどい悪口を云つたものだが、其の當非は諸君の判斷に任せる事として、沙門は忍辱を以て力とする。國王は兵城を以て力とする。羅漢は精進を以て力とす。菩薩は慈悲心を以て力とす。此の力の最も優秀なるものは、缺陷の多い血まみれの世界を慈悲心を以て世を利し、世を救済する程大なるものがあるまい。是れ亦禪の力の致す處であつて、禪と云ふても無暗に棒喝や公案を振り廻はすが主眼ではない、それは末の手段であるから、無意義の棒喝は廢めた方がよいのである。

死生の境

一 病氣になりきる

去春衲が誤つて流行性感冒に犯され、それが遂に變じて肺炎と云ふ事になつた。佛教の言葉で言へば誠に不冥加で、甚だ不調法な事を致したと思つて恥ぢ入つて居る様な事である。

さて、衲に對して病氣の感想はどんなものであつたかと云ふ様なお話が時々出るのであるが、病中の感想と改めてお尋ねを蒙ると、一寸こんな感想があつたと纏めてお話しする様な事は何もない。平生衲が自分一己で考へて居る事を申し上げれば、矢張り病中は病氣を相手にして居る。可笑しな言葉ではあるが、病氣の時には病氣と親しむのである。もう少し禪宗臭く言ふと、病氣になつたら病氣になりきる。もう少しつと叮嚀に言ふと、病氣の時には病氣の儘に居ると云ふ様な譯で、矢張り子供の時には子供の様な心持、大人の時には大人の様な

心持、若い時は若い様な心持、楽しい時には楽しい様な心持、健康の時は健康の時のやうに、病氣の時には矢張り病氣に委せて居る。病氣まかせと申しますが、そこは今一寸思ふ事を口に言ひ現はしたのである。

二 實は死にともない

さうして今度の病氣の感想と云ふものは、是れと云ふ纏まつた事は無いが、ただ何となく是位の病氣では死ねないだらうと思つて居た。成程後から聞いて見ると病中には一日に四五十通づゝも見舞の電報が来て、其他見舞に來られた方々が入れ代り立ち代り來て、皆御心配下されたに拘はらず、自分は殆んど其の當時の事は知らないで居つた。當時お醫者さんからカンフル注射をされて、何とか云ふ薬を吞まされた、其れが呑みにくいので、又注射されて大分際どい所まで病氣は進んで居つたのであつたが、成程苦しい事は苦しいに違ひない、何か胸の上に重たい石でも載せて上から壓する様な心持がして一寸困つたが、然しまだ斯う云

ふ事で死ぬるものではないと思つて居つた。思つて居つたのみならず、もう少し進めて言うて見ると納は今度の病氣では死なぬと、自分で獨り極めに極めて居つた。死なぬと思ふのみならず、もう少しくどくしく廣げて言うて見ると、實は死にともない、之は古人が言うて居る、一休和尚であつたか、かういふ事を言はれた。其の一休の故智を學ぶと云ふ事ではないが、何うしても死にともないと思つて居つた。

三 御恩報じの時

死を見る事は歸するが如しと云ふ様な事を口にするのは我々の尋常底である。死ぬ位な事は丁度故郷へ歸るやうな事で、一日働いて少しく夜間に憩ふ様なものだと言つて居る、又さう極めて居るが、只今度の病氣に付ては死にともないと思つた。是は何故であるか、一寸申して見ると、納が此の世に生れ出て來るには、もう胎内に居る内からして父母の大恩を受け、生れ出て後も其の通りで父母の大恩は申すに及ばず、自分を教へて呉れた師匠の恩、

朋友の恩、段々擴めて見ると、知ると知らざるに拘らず、此の人間お互ひの恩を受けたのである。是れは容易ならぬ事と思ふ。間接直接にモツと深く考へると、天地の大恩と言つて宜いのである。それに又色々の意味も籠つて居るが、其の大恩を受けて漸く半人前か一人前の人間になつた。振返つて見ると到底自分は獨り立ちで今日まで來た譯でない。それが人生百歳と見て、五十歳はまだツイ七八年前の事で、漸く人生の半を過ぎて是から少しづつ御恩報じをせうと云ふ時期に推移つて居る、少しづつ色々の恩に報答して行かなければならぬと云ふのに、此儘瞑目して仕舞つては自分の素志に背くと思つたからである。

四 病中所感

病の方では此奴殺してやらうと思つたか何か知らぬが、自分の慾ばつた考へから言へば決して今度は死にともない。そこで以て一日でも一年でも二年でも、成る事ならば、慾ばつて七十も百もの齡を重ねて、以て聊かなりとも、佛敎道德でいふところの報恩の仕事をして死

にたい。仕事と言うても大した事は出来ないが、志す所は、廣くいふと天地の恩に報いたい。狭く言うても佛敎では四恩といふ國王の恩、父母の恩、衆生の恩、宗敎即ち三寶の恩、我々精神上の主なる所の大恩に報じたい。何卒少くとも一つ自分は自分だけの仕事をして置きたいなどと、病氣をして居つても慾張根性があつて、どうしても死にともないと思つて居つた。病中の感想と云ふならば只それのみである。

五 先賢の臨終

我が佛敎では生死一如と云ふ様な事は、いはゞ尋常の茶飯と言つて宜い。病氣になつたら今更の如く生死一如とか、生滅不二とか云ふ様な事は言ふだけが野暮である。兎に角死の覺悟と云ふ様な事は、宗敎家としては最も大切な問題として平生から考へて居らなければならぬ。けれども納一己の考へからいふと、死の覺悟と云うても別に覺悟は無いであらうと思ふ。我々が日々夜々其の境に臨み其事に接し、其時々々其日々々々、感謝の念に住して愉快に送つ

て行くのが、それが納の安心である。若し死ぬ時は端然寂然として死ぬとか、筆を取つて偈を書して死ぬとか、或は座脱立亡として殊勝な姿をして死ぬとか云ふ事は納一己だけは考へて居らぬ。それを考へて置くのも宜いが、其邊の事を考へて見る暇は無い。其日々々の自分の務め、人間として爲すべき事を爲して、其儘息を引取つたら納一己の極樂で、即ち大往生と思つて居る。歴代の祖師方は各々偈を唱へたり、また座を組んだりして死なれた所の立派なお手本がある。けれども納は是非共さういふ事を眞似たくはない。出来るならばそれも結構だが、さういふ事を眞似たくない。たゞ息を引取る時まで各自其日々々の務めをしてスウと息を引取つたら、それで早や本望である。大悟徹底も即ちそれであると思つて居る。故にお釋迦様の死に様がどうの、祖師方の往生際がどうのと云ふ様な事は、納には問題でない。昔し有名なソクラテスが死ぬ時に、何も哲學者染みだ悟りみだやうな事を言はないで、只私が某から一疋の鶏を借りて居るが、此丈だけ返して呉れと言つて横臥して死んだ、是は納の理想に適つて居る。我が禪の立場からいふと有難い顔をして、手を合せて偈でも唱へて死ぬ

のも宜しいが、寧ろ何方を取るかと言へばソクラテスが鶏を返して置いて、是れでモウ世の中に借りが無いから息を引取ると言つて、スウと行つた方が納の氣に入つて居る。之に色々々理窟をつけずして、自分はさういふ方面に大變な同情を持つて居る。病中の感想と言つても約めて言つて仕舞へば只それだけである。

六 新陳代謝

斯う云ふ様な有様で、今此處で御挨拶を申し上げて居りながら死んでも、それでも宜しいのである。佛教では常に煩惱を排斥して悟を求めると云ふ様な事を申すが、之を現實的に言つて見ると、唯々古いものを捨て新しいものを取ると云ふ程の事で、これは納一己の臆説かも知れぬけれど、古いものを捨て新しいものを取る。別言すれば新陳代謝する、乃ち我が茲に存在して生々として活動して居るのは、畢竟新陳代謝作用の表現である。元來此體は皆細胞より出来て居る、血も骨も肉も皮も細胞も、平たく云へば極々微細な虫の様なもの

が幾つも堆く高まつて、さうして一つの身體を作つて居るのである。我々人類が國家を造つたり社會を造つたりして居るのも、丁度この身體を造り上げて居る細胞みた様なものである。一匹の細胞が務めを怠り、小さな虫一つが段々務めを離れて来ると、健全な身體も何時の間にか虚弱になつて役に立たなくなくなる。健全なる身體であるならば、無数の細胞が新陳代謝を續けて身體の中に活動して居るのである。人類社會もさうで、百年千年も新陳代謝が行はれず其儘にして行つたならば、宗教も道德も悉く退歩して仕舞ふ、細胞が怠ると病氣となり、遂に死滅に歸して行くのである。故に我々は先づ體中の小さな虫一匹として、即ち社會の一員として此の健康を保ち、さうして常に怠らずして務め以て病氣に勝ち、常に健康にならなければならぬ。健康になつたならば更に一層勇氣を鼓して働かうと云ふのが、それが一種の宗教的信仰であらうと思ふ。ニイチエの言つた言葉に「我々は常に我が體中の古いものを排泄する事を以て能事とする」と、いはゆる新陳代謝を盛にすると云ふ事である。一種の信仰の活躍して居ると云ふのもそれである。斯様にして少し計りでも腐つた所がない、弱つ

た所がない、而して懶けた所がない様にして、始めて人間の務めを果し得ると納は固く信じて居る。

真理の大寶藏

一 人生の真相

彼の有名なる獨逸の詩人ハイネが、一つの大疑問に逢著して詩を作つたのがある。其の詩の意味を掻摘んで申して見ると、假に吾々が大海原の畔に立つたとして、仰いて彼の蒼々たる天を視、俯して彼の茫々たる地を眺め、更に其の四邊を眺めて見ると、脚下は蒼々渺々たる、寄せては返し返しては寄せる大波小波が朝から晩まで打返し打返して居る。之は何の作用であらうか。又雲の飄々として棚曳ける。松風の颯々として吹き過ぐる、皆其處に何等かの意味がなくてはならぬ。たゞ吾々が機械的に動いて、醉生夢死に終つて了へば、人生は誠

に無意味のものである。天の天外、地の地外、其處には此の大なる宇宙を貫いて居るところの何等かのあるものが潜んで居ると、斯う云ふ意味である。吾々日常の行動の上に於ても、眼を具して之を見れば、明かに之を見得るのである。或者は悲觀し或者は樂觀するが、人生の真相は苦に非ず樂に非ず、無限の空間に亘り、無限の時間に亘るところの何物かゞ常に動き、何物かゞ常に働き、何物かゞ常に命じて、吾等をして働かせて居るやうである。之を名づけて神ともいひ佛ともいふ。乃ち何等かの活きた力が内に潜んで居るのである。これは他から注入せられたものではない、自分自身の精神の内容に立入つて考へて見れば、丁度彼の鐘を撞けば音のする如く、吾々の心の内容に向つて工夫をすると、其迄に偉大なる何物かを發見する事が出来る。其時初めて不可思議と觀じたる宇宙の默示と冥合し、大自然に觸れ、人生そのものゝ真相を徹見する事が出来るのである。

二 眞理を求めて

支那の管子の言に「之を思ひ、之を思ひ、又重ねて之を思ひ。之を思ひて得ざれば、鬼神將に之を告げんとす」と云ふ語がある。又耶蘇教のバイブルにも「尋ねよ然らば逢ふ、門を叩けよ、然らば開かるゝ事を得ん。麴麴を求むるものに誰か蛇卵を與へんや」といふ句があつたやうに記憶するが、其意たるや共に一つで人に若し眞理を追ひ求むる心だにあらば、人は必ず其の求むるところを得、其の尋ねるところを啓示せらるゝものであるとの意である。眞理を追ひ求むる心の毫もない者の眼から見れば、四維上下、何の意義なきものゝやうに思はるゝであらうが、孤兒の乳を慕ふが如く、眞理を追ひ求むるに急なる者の眼より觀れば、木火土金水、悉く眞理の體で、宇宙は實に眞理の大寶藏である。昔、香嚴禪師は、庭を掃く際に手にせる箒の端に小石が當つて、其の石礫が側にある竹籤の竹にカチリと音を發した。其の一刹那豁然として自己本來の面目を徹見し、此間の的意を悟了したといふ事である。これはニウトンが林檎のポタリと地に落ちるを見た一刹那是宇宙に引力の法あるを覺つたのと同じ這裡の消息であつて、絶えず眞理を追ひ求めて間斷なき工夫を怠らなかつた結果である。

る。

三 古池や蛙飛込む水の音

禪の悟りと云ふ事はむづかしく論ずれば際限のない事であるが、約言すれば一種の修養から練り出した心の光であると、かう見たら宜しい。

彼の有名なる俳人芭蕉は、人の知る如く佛頂和尚に就いて參禪工夫をした。和尚は水戸の鹿島の根本寺に住して居たが、平素ムツとして怒つたやうな顔をして居るのを俗に佛頂面といふが、さういふ顔をして居る和尚で白齒を見せた事がない。芭蕉はこの和尚に就いて禪を修すると共に、又其の俳句は實に妙を得て居た。其の味ひは心を練つた所から大悟したのである。

一日和尚は六祖五兵衛といふ門人を連れて會々深川に居る芭蕉翁に逢ひに行かれた。そのとき六祖五兵衛が先に立つて、

「如何なるか是れ閑庭草木裡の佛法」

と問うた。すると芭蕉が

「葉々大抵は大、小抵は小」

と答へた。すると今度は佛頂和尚が

「今日のこと作麼生」

と問はれたので、芭蕉答へて

「雨過ぎで青苔濕ふ」

と曰うた、和尚又問ふ

「青苔未だ生ぜず、春雨未だ來らざる時如何」

其時に丁度蛙が古池に飛び込んだ。其の音を聞いて忽然として芭蕉は悟りの極意を得たのである。それで和尚が「汝は道の極意を得たり」と云うて印可證明を與へた。

其座に居た杉風、嵐雪、其角等多くの門人が翁に向つて、

「蛙飛びこむ水の音で御許しを得たが、題の五文字をつけたら如何でせう」と言つた。然らば先づ其方達から」と云はれて、杉風は

「宵暗や蛙飛び込む水の音」

とやつた。すると嵐雪が

「淋しさや蛙飛び込む水の音」

とやつた。其角は、

「山吹や蛙飛び込む水の音」

各々其力が見えて居る。翁は大いに喜んで、皆豪いが、わしは矢張り其儘に、

「古池や蛙飛び込む水の音」

だと云はれた。これが古今に名高き句である。

凡てかういふ工合に自由になつて來れば、何事をするにも取り外しがない。獨りで淋しさを感じずして楽しんで仕事をする事が出来る。これには修養を續けて努力せねばならぬので

ある。

四 解つたやうで解らぬ

地球は一日に一回轉し、朝起きれば日は出で、日暮るれば星現はれ、日夜同じ事を繰り返しては居るが。時津風枝を鳴らさぬ長閑な日にも、一たび低氣壓の襲來あれば、瞬く内に暴風雨を捲き起して豪い嵐が吹きすさび、山を潰し水を怒らせ、船を覆し家を倒すやうにもなる。春來れば花は咲き、秋來れば木の葉が散る。酒に酔へば人は千鳥足になつてさんざめく、冬になれば一望白朧々たる雪に包まれる、數へ來れば人の周圍は不思議な事ばかりである。

是に於て昔の代には地震が起るのを見れば地の下に大きな鯨の如き魚が住んで居つて、それが身動きをするとか、或は又希臘の神話にある如くプリウードと云ふ陰府の神が、地下に高御座を据ゑて居つて、其神が手にする三叉の戈を揮ひ動かしたので、かく地が震ひ動くのだなる。

ぞと考へたものだ。併し人智が進歩して經驗が重なり時代を経るに隨つて、漸次に不可思議の幕が取り除かれ、茲に文明の進歩となつて、人は益々廣く眞理に觸れ得られるやうになつて來ては居るが、まだまだ人の覺り得たる眞理の場面は極々狭いのである。宇宙は不可解の事ばかりが多い。解つたやうでも世の中の事は中々解らぬものである。古い俗論に「この垣一重が黒鐵の……」とか申す句があるが、この黒鐵の垣に支へられて、多くの人は眞理の大寶藏に没入することが出來ず、我利我執の雲に包まれて、其日々々々を暮して居る。斯る有様では時に臨んで挫折し、煩悶に陥らざるを得ない。將來大いに發展せんとするには、益々精神上の力を深く根底から養はなければならぬのである。

漱石氏と禪

夏目漱石氏が納の所に來たのは、能くは記憶に存せぬが、今より約三十年程も前の事である。大學を卒業したばかりで高等師範に教へに出て居られたとか言つて居たやうである。本

當に飄然としてやつて来て、凡そ半年ほども禪堂の生活をして居つた。その間の氏は言ふまでもなく禪を修せられたり、また靜かに自らの生物觀を押し進めて行かれたやうに覺えて居るが、何しろ柄の宗旨などでは、たとひ雜談などの折に種々なことを物語る機會はあつたとしても、互に深く語り合ふと云ふやうなことが無いところから、その時の漱石氏に就いては鮮かな印象を有つてゐない。従つてその節の參禪が、漱石氏の人生觀や藝術觀にどんな風にして入つて行つて居たかは知る由も無い。

氏の小説、門と云ふのを或る人が持つて来て、漱石氏が始めて私のところへ来た折のことが描いてあるから讀んで見よと云ふので、始めて氏の小説を手にした譯だが、あの中に宗助と云ふ男が鎌倉の禪堂へ来て「老師々々」と皆の言ふ其の老師に逢つて見ると、心の内でどんな老人かと思つたら、まだホンの若い坊主だと驚く作、あれが可笑しかつたので今でも覺えて居る。氏の參禪生活はあんな風な氣持であんな風にして始まつたのであらう。まあ一口に云へば氏の參禪生活は極めて平凡な普通なもので、とりあげて異彩と認められるやうなこ

とはなかつたのである。

その後長らく相逢ふことも無かつたが十四五年前のことであつたが、丁度中村是公氏が滿鐵の總裁であられた當時、漱石氏は中村氏を伴うて鎌倉へ出向はれ、絶えて久しい會談の折を得た。それは中村氏が私に滿鐵の若い人達に何か話をして呉れとの依頼に見えられたのであつた。また去年私が大病に冒されて居た時も、中村氏と二人で見舞に來られたのださうだが、死ぬか生きるかの折からとて後になつてそれを知つた次第である。爾來相合ふこともない中に漱石氏は死んでしまつたのである、五十歳と云へばまだ一世代に期待する多くのものゝ在る間に逝かれたのは惜しい。氏の家はもと眞言宗なのであるが、死ぬ時に中村氏に言ひ残されたと云ふので、禪宗の葬儀を行ひ納が行つて引導を渡して來た。近年にない靜かな嚴かな葬儀であつた。

納が何かの縁で漱石氏と結びつけられてゐるところは以上の様な次第である。納はもとからの氏の作品も思想も知らず、最近の明暗なども人の噂によつて聞かされるだけで、どんな

ことが描いてあるのか判らないやうな譯で、最近どう動いたと云ふことも知らない。私が漱石氏に就いて知りたいたいと思ふ數々は、これからの月日を俟つて貰はねばならぬのは遺憾である。

たゞ私の知る限りの漱石氏の風格は、我が禪宗の白隱禪師が「吾は禪の俠者なり」と云はれて居るが、そんな様に思はれてならない。元來が江戸ツ子に生れて、清廉な氣質を有つてゐた氏は、生れながら禪味を帯びた人柄であつたと思ふ。しかしながら氏の禪の修業は、修業としては大したものではなかつた。修業は大したものではなかつたが、氏の性根が佛教乃至東洋思想の根本に觸れて居たことは知れる。「去れ私則天」と云ふのが氏の最後の思想だと語られて居たとのことだが、それは明らかに大乘佛教の眞精神なのである。

藝術としては氏のを何も讀んで居ない私が、たゞ私だけの漱石氏に就いての知識から氏の藝術なり思想なりを推察して見れば、氏は自ら自然と融合して行つて、何人にも接し得ないさま々々な自然の姿を見出して來て、これを持つて個人なり社會なりを押し進め高めて

行くと云ふやうな立場に居つたのではないかと思ふ。禪では云ふまでも無く自然と融合することを目的とする。自ら自然に近寄るのか、自然の方から近寄つて來るのかそれは知らぬがたゞ融合するのである。漱石氏はこの境地にあつて、そこから様々な思想に具を興へて、小説を創つて行つたのではないかと考へるが、どんなものであらうか。

何も知らぬ私は、文壇で漱石氏と似通つた道を歩んだものを求むれば、或は幸田露伴氏の作品なり経歴なりがそれに近いかとも考へて居つた。しかし或る若い人の説くところを聞くと幸田露伴氏の思想乃至氏の作品に表はれた思想は、その深い佛教の知識佛教の思想を銜つたやうなところが在る。露伴氏にあつてはそれはたゞ知識であつて、漱石氏のやうに本當に自分の中へ領有して仕舞つたのでは無いといふ、或はそれだけの違ひがあるかも知れないと思つた。

弱き女の爲めに

一 天人と夜叉の所在

古い物語に傳へらるゝ天人とか、或は又御經のうちに散見する夜叉だとか申すものは、一體何處に在るのだらうかと多くの男女は怪しむが、何處にある彼處にあるといふべきものは無い。皆な人の心にあるので、女の心の中にも、様々のものが住んで居る。

動物の如くにして動物ならず、神の如くにして神ならざる天龍も、惡鬼の如き夜叉も、天上界の音樂師たる乾闥婆も、争鬪を是れ事として其日を暮す阿修羅も、微妙に轉づる天界の靈鳥迦樓羅も、天上界の唄子なる緊那羅も、大蛇の如き摩睺羅伽も皆な女の心の中に住んで居るのである、八百萬神々は、高天原にのみ在りましたものと思ふと大變な謬見である。我心が即ち八百萬の神々の在す宮殿にもなれば、又惡鬼毒蛇の棲む窟ともなるのである。お互

の心に慈悲の萌があつて、規律を守り忍耐して努力進歩する氣のある間は、是れ八百萬の神が其の赫灼たる靈光を我が心内に放ち給ふの時、貪慾憤恚の焰の炎々たる時は、是れ惡龍惡鬼が、我が心の内に跳梁する時節である。

二 寸善尺魔

波斯の宗教では、世の中は何事も善神と惡神との戦ひで、善神の爲す處を惡神が片端から壞して歩くものとして居るが、人の心は「寸善尺魔」と云うて、一寸の善を爲さうとすれば一尺の惡魔が現はれて来て、善を爲すのを妨げようとするものである。人の一生は寸善と尺魔との争ひで、正念邪念が晝夜の絶間なく、人の中に闘つて居る。此の争鬪の繼續が人の生涯と云ふものである。その争鬪のうさには、佛と阿修羅との戦ひもあれば、又明るい神と暗い神との争ひもある。迦樓羅が轉つたり、緊那羅が唄つたりする美しい聲の聞ゆる事もあれば、又摩睺羅伽の毒々しい姿が心の裡に現はれる時もある。

昨今はあまり見當らぬ様だが、十二三年前までは、よく縁日なんかには蛇使ひの見世物があった。蛇使ひの女は、あの毒々しい姿の蛇を自由自在に使つて、之を如何にも可愛らしいもの、様にして見せるのである。女の心に棲む貪欲瞋恚の毒蛇も、若し之を大慈大悲の大智大勇猛心を以て、うまく使つて行きさへすれば此の蛇つかひの蛇の如く其女の自由になつて、如何にも可愛氣に見ゆるやうになるものである。女と雖も我が心にある夜叉、阿修羅、摩睺羅伽と戦つて之れを征服し、乾闥婆、緊那羅、迦樓羅の美しい音楽を我が心の裡に聞かうとするのには、大慈、大悲の心があるといふだけでは駄目なのである。大慈大悲が更に發展して、大智となり大勇猛心となり、身を以て執金剛神たるに至らねばならぬのである。されば妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五にも、觀世音菩薩は、時に執金剛神の姿を現じて説法すと説いてある。

三 執金剛神とは何ぞ

寺院なぞの二王門の處に安置されてあるのが、是れ即ち執金剛神で、執金剛神は天界の力士とも觀らるべきものであるが斷惡生善の神である。近世の語を以ていふと、執金剛神は、人道の權化とも視るべきもので、古へよりの大人英傑の傳記を見るに、いづれも皆執金剛神としての働きがある。

鎌倉圓覺寺の開山、佛光國師は宋末の支那僧で、北條時宗に迎へられて日本に來られたのであるが、禪師がまだ支那に居られた時分のこと、北方蒙古の忽必烈が元の兵を率ゐて宋に押し寄せ來り、徳祐二年に及び、元兵は禪師が難を避け居られた温州の能仁寺に亂入し、一人の兵が大刀を揮つて、將に禪師の頭を切らうとすると、禪師は其時端坐不動のまゝ泰然自若として、

乾坤無地卓孤筇。 且喜人空法亦空。

珍重大元三尺劍。 電光影裡斬春風。

の偈を唱し神色共に變らず、元の兵が三尺の劍を揮つて我が頭を斬らんとする態は、電光が

キラ／＼と閃いて春風を斬るが如く如何にも美しい、恐ろしいとか怖いとかの念が到底起るもので無いと喝破せられたので、禪師の生死を透脱する大徳には、元兵も驚いて禮讃して去つたと傳へられて居る。是れ全く佛光國師に、執金剛神としての働きがあつたからの事である。

この圓覺寺の開山佛光國師に師事したものに、美濃國興性寺に住し、京都の眞如寺にも關係した如大禪尼と申される女がある。出家前の俗名を千代能と稱し、當時鎌倉の執權たりし時宗の一族、北條顯時の女であつたが、千代能の父顯時も祖父の實時も亦兄の貞忠も戰國時代に珍らしい學問好きの人々で、かの有名なる金澤文庫を武州金澤に建て、和漢の書を蒐めて講學の便に供したのは、實に北條顯時一家である。

千代能は、斯る祖父兄の間に育てられたので、當時の女流に稀しい學者となり、和漢古今の學にも通するやうになつたが、其中禪の宗乘にも心を注ぎ、熱心に佛光國師に參學したものである。學問が既に群を抜いて居る處へ更に參禪して修養を積み、元の勇兵を一吼によ

つて走らした佛光國師の指導を受けたのである、故に千代能の想見は愈々尋常の婦女子の及び得ざる境地に達し、煩惱諸惡を斷ち、身を以て衆善奉行の執金剛神たるに至つたのである。

四 千代能の遺文

古來の英傑で、男ばかりが大智大勇猛心の潑刺たる執金剛神の働きを致して、惡を斷ち善を生んだのではない。女でも千代能の如く俊逸一世に冠たるものは、皆執金剛神の働きを顯はして居る。陣頭に馬を進めて三軍を叱咤した佛蘭西のジャンダーク、古くは羅馬の愛國者ブルタスの妻など、いづれも皆な是れ報金剛神の權化である。千代能は出家して俗社會の生活營みこそせなんだが、その能く心中の惡鬼毒蛇を征して生死の上に超然たるを得た點は女ながらも正しく執金剛神の化身である。千代能の遺した文中に、

それ地獄遠きにあらず、極樂亦眼前にあり、人世百歲古來稀なるに、秦皇漢武長生を求めんとするも徒らに千歲の笑をのこし、彭祖が一掬の菊水に八百歳を露の間に保ち、東

方朔が一枝の桃三千年を瞬時に過ぐ。短かしとやいはむ、麻生が邯鄲一睡の夢、五十年の盛衰長しとやいはむ。鐵拐琴高今何地にありや。

といふのがある、有爲轉變幻滅頼むべからざる世相を達觀し、あらゆる煩惱を斷つてしまはねばかく、凝滞したところの無いサラリとした心情になれるものではない。

五 強き女となれ

女に限らず、兎角人間と申すものは、凝滞し易いもので、初めのうちは人が酒を飲んでる積りでも、何時の間にか人が却つて酒に飲まれ、遂には酒人を飲むに至るものである。殊に女は何事にも凝滞し易く、執着の煩惱が激しいかの如く見受けられる。「仕事に忙がしくて困る」とか「舅姑が喧ましくて困る」とか「小姑が着纏くつて困る」とか申す愚痴は、畢竟するに女が我が心の裡に勢を逞うする夜叉惡鬼毒蛇を退治して煩惱の執着を斷つ執金剛神の働きが出来ぬより起るのである。千代能の詠める歌に

兎や角とたくみし桶の底ぬけて

水たまらねば月もやどらず

といふ一首がある。普通の女ならば、手桶の水に月影が映つて美しいとでも詠むべきところだが、流石は千代能だけあつて桶の底が抜けて仕舞つて水も溜らねば月も宿らぬと詠んで居る。女は總て千代能の如く、大智大勇猛心を起して執金剛神の働きを致し、底の抜けた桶のやうに水も溜らず月影も宿らぬ心情のものに成つてしまはねばならぬ。然らば、憎い欲しい可愛いの妄想に苦しめらるゝこともなく、佛光國師の偈にある如く、春風をキラリと斬つて消ゆる雷光の趣ある、何となくフンワリした中にも鋭く強いところの具はつた女になれるものである。斯る女は、沙翁に「弱き者上爾の名は女なり」と云はれたやうな女にならず、「強き者上爾の名は女なり」と云はれるやうな女になれるであらう。今の女等は「新しき者上爾の名は女なり」と諺はれたがつてる様子だが、それよりも「強き者上爾の名は女なり」と頌せらるゝ如き執金剛神の働きある女となる事が大切であらうと思ふ。新しくならうく

として日々フワ／＼して暮す婦人等に、是非之を心懸けて貰ひたいのである。これ即ち良妻賢母たるの根本義であらうと思ふ。

六 觀世音の當體

觀世音菩薩は到る處に信仰せられて居る。單に日本のみならず、滿洲に於ても、南方支那に於ても、臺灣などに於ても、觀音は廣く信仰せられて居る。殊に女人とは因縁の最も深いもので、觀音の信仰者には、不思議なほど婦人が多いのである。南方支那及び臺灣では、媽姐と稱せられる佛様が又廣く信心渴仰せられて、到る處に媽姐の廟を見るが、傳説に依れば媽姐は福建邊の長者の女で一歳地方の早魁甚だしく、飢饉にもならうといふ大事の時に、此の媽姐と申す長者の女が、一身を犠牲にして夏天に獻け奉つたので、天ために雨を降らせ、生民の飢饉に苦むを救ひ拾うたとの事である。此の媽姐は觀世音菩薩の化身であるとして有難がられて居るものらしい。媽姐の祭禮は、衲も臺灣で實見したが、實に賑やかなものであ

る。

觀世音菩薩は、何故かくまで廣く信仰せられ、殊に女人の渴仰を受くるものかと申すに、觀世音菩薩は大慈大悲の具體せられた化身で、人の心には誰しも皆な慈悲心があるからの事である。人は皆な又自分の心の中にある此の慈悲心を貴いものであると思つて居る。茲に於てか之を大きく延長して大悲大慈の觀世音菩薩とし、心外に顯現して之に禮拜供養し、我が到らぬところの小慈悲心を向上發展させ、拔苦與樂の神通力を具へさせ給ふ觀世音菩薩の如くならうとするに力むるからである。女人には殊に慈悲同情の心が深く、之が女人の特徴である。とさへ謂はれるのに徴するも、女人が觀音を深く信仰するに至れる所以のもの又決して偶然ではないのである。

七 勇氣と慈悲

優しい弱い女人ばかりが觀音を信仰するものとは限らない。昔から強い／＼勇者が、又不

思議に觀世音菩薩を信仰したものである。聖徳太子は篤く觀音を御信仰あらせられ、太子が靜思默想の道場に充てさせ給うた奈良法隆寺の夢殿に安置せらるゝ觀世音の立像彫刻は、太子の御姿を寫し奉つたものとも傳へらるゝが、奈良朝初期の美術的遺品として有名な傑作である。又洛東清水寺の緣起に依れば同寺はもと征夷大將軍阪上田村麿が、人皇五十代桓武天皇の延暦年中に、金色八尺の千手觀音を安置し奉り、造淵建立せる國家鎮護の靈廟であると云ふのである。

田村將軍は、身丈五尺五寸、胸の厚さ一尺二寸、身の重さ二百一斤、鬚髯は針金の如く、臂力衆を抜くと傳へらるゝ程の偉丈夫で、蝦夷を平定せられた猛將である。その猛將軍田村麿が、大慈大悲拔苦與樂の化身たる觀世音菩薩を信仰せられたといふのであるから、一寸不思議と思はれるが、聖徳太子や田村將軍のみならず、古來の猛將勇士にして、觀音を信仰し其の尊像を鎧の胴巻に納め之を念持佛として出陣した例は決して少くは無いのである。

勇氣と慈悲とは、一寸考へると全く別々のものであるかの如くに見え、心理學者などに云

はせたなら、勇氣は意能の作用で慈悲は感能の作用であるなどとの意見があるやも知れぬが、勇氣といひ又慈悲といふも、要するに一つの心の發顯で、別々に二つのものが心にあるのでは無い。同じ一つの心が、或る事情に遭遇すれば、勇氣となつて顯はれ、或る他の事情に遭遇すれば、慈悲となつて顯はれるのである。勇氣も慈悲も落つれば同じ谷川の水で、もとは共に一つの心たるに過ぎぬ。されば勇氣の強い人は慈悲心に深く、慈悲心に深い人は又勇氣にも強かるべき筈のものである。凛然たる勇氣に富む猛將が、大慈大悲の觀世音菩薩を信仰したのも全く之が爲めで、我が胸中に溢るゝばかりの大慈悲があつたからの事である。古へより眞の勇士は、蝶の羽音にも涙を催はし、枯尾花のそよ音にも哀れを催はすものだと思はれてあるのも之に外ならぬのである。

八 水火も畏るゝに足らず

實際に於ても、水火刀杖の難を冒し、我が一命を無いものと心得て、火の中にも水の中に

も飛び込み劍の山にも登らうと云ふが如き事は、一片の猛勇があるのみで到底出来るものでない。生命懸の事は、斯くすれば、それが自分以外の大衆の利益幸福を招来することになるからとの大慈大悲の心があつてこそ、初めて成し遂げ得らるゝものである。單に自身の利益幸福の爲めとするならば、何事も生命あつての物種ゆゑ、其の仕事の事情から、水火刀杖の難を冒して生命を棄て、仕舞ふなど云ふのは、此上もない馬鹿くしい消息になる。田村將軍にしても、將た楠木正成にしても、之に依つて天下國家を濟ひ、普く民衆の苦痛を抜き之に代ふるに快樂を以てしようとの大慈悲心があつたればこそ、絶えず彼の如き惡戰苦闘を續けて、あれだけ迄の事が出来たのである。

されば妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五にも「若し是の觀世音菩薩の名を持つる者ありて若し大火に入るも火も燒く能はず……若し大水の漂はす所となるも其名號を稱すれば即ち淺き所を得べし」とある。其意たるや他なし、大慈大悲の心だにありて之を堅く我胸中に把持すれば、水火の中に飛び込んでも、毫も苦痛を感じず、之も人の爲めであるとの大安心

を得、些か畏るゝ色なくして、之に飛び込み死に就く事猶ほ歸するが如き大勇猛心を發起し得らるゝものだといふにある。慈悲心即ち同情の心は、勇氣と全く異つた心の作用ではないのである。慈悲心は其儘勇氣であり、勇氣は其儘慈悲心であり同情心である。眞に人の爲め世の爲めに盡さうとする大慈悲が胸にありさへしたら、勇氣は力めずして自ら勃然として胸中に起り、水火刀杖の難をも敢て辭する無きに至るものである。大慈大悲はれ即ち勇氣である。

九 橘媛の義氣

物に哀れを催し、他人の苦痛に同情する慈悲心はあるが、少しの事にも恐怖を覺えて、進んで難局に當る勇氣に乏しいから困るなどと歎く人も能く世間にはあるやうに見受けるが、慈悲心があつて勇氣の無いと云ふ筈は無い。畢竟するに、慈悲同情の心が小さく、大慈大悲になり得られぬので、勇氣に乏しくなるのである。本人は世間一般から、慈悲同情の心には

富むが、勇氣に乏しいものだと思はれて居る。勇氣の乏しい結果、往々にして難局を切り抜ける事が出来なかつたり、事に當つて惑ひを生じ右往左往して躊躇煩悶し、決斷決行が出来ずにウロ／＼し、爲めに他人の手足纏ひになつて迷惑を懸けたりするやうになるのは、如何にも女人の常である。しかし是は勇氣の原動力となるべき慈悲同情の心が小さく、觀世音菩薩の如く大慈大悲の身となり得ず、小慈小悲に満足する傾向が、女人に有勝なるより起る事である。

女人と雖も、衷心より大慈大悲拔苦與樂の觀世音菩薩に歸命頂禮供養し、絶えず心に觀世音菩薩の名號を有持するまでとなり、全く我を没して他に同情同化し得るに至れば、必ずや勇氣を生じて、凡々たる男子の及び得ぬ果斷決行の出来るものである。

人皇十二代景行天皇の皇子に渡らせられて日本武尊と稱し給うた小碓命が、東征の陣を進められ、海上を相模より上總に向はせられんとするや、暴風が起つて舟は漂ひ始め、まさしく覆没せんとした。如何しても乗船者の數を減じて船足を軽くするより覆没を免るゝ道が他

に無い。茲に於てか命と御同船遊ばして居つた命の寵姫橋媛は、自分は女の身で戦ひの役には立たぬ——命を始め奉り將士一同の生命を助けるには自分が海に投じて死するが何よりであると考えさせられ、海神の怒を宥める爲めとあつて、一躍海中に飛び込んで歿し給うた。實に五尺の男子も及ばぬ御勇氣であり又果斷決行であらせられる。橋媛の此の御勇氣は如何なる犠牲を拂つても、日本武尊を始め奉り一行將士の生命を助けてやりたいとの大慈大悲の御心があつたので自然と起つたものである。飽く迄も他人の利益幸福の爲めに盡さうとの大慈大悲の大同情さへあれば、弱い形になつて顯現して居る女人も、皆かく橋媛の如き男も及ばぬ勇氣に充ちたものに成り得られる。暴虎憑河は素より女人の能くし得らるゝ處ではないが、大慈大悲さへあれば女人も亦立派な勇者となる事が出来るのである。

一〇 ゴタイヴァ夫人

柄が一身上の經驗に依つて反省して見ても、何事かの所置を致して置いてから後になつて、

其時に今少し突き込んで一刀兩断の所置に出でてさへ居れば、こんなに事を面倒にせずとも済んだらうと悔ゆる如き事情に後日遭遇する場合は、當初其事を所置した際の、慈悲心が小さくて、他人の利益幸福を末の末まで考へてやり得なかつたのが、何時でも原因になつて居るらしく思へる。他人の爲に其の永遠の利益幸福を同情つてやるだけの大慈大悲がありさへすれば、果斷決行の勇は容易に起るものである。

自分の利害より打算せず、他人の利益幸福を増進する爲めに、少しでも苦んだとか、一滴の血でも流したとか云ふ事は、非常なる感動を社會に與へ、末永く後世にまで傳へられるものである。佐倉宗五郎の事蹟なども、種を洗つたら劇や講談で傳へらるゝ程に大袈裟な者では無からうが、自分以外の者の利益幸福の爲めに汗を流し血を流したので、あれ程までに大きいものになつて今日までも傳へられ、宗五郎は三歳の兒童によつても尊崇せらるゝのである。釋迦、耶穌、日蓮、サボナロラなど各宗の開祖は皆殉教者と崇めらるゝ者の永く人心を支配する所以は、一に社會を益せんとする大慈大悲より發した勇氣の行動によつて、自分の身

を苦しめ或は殺したからである。

これは歐洲暗黒時代の初期に起つたと傳へらるゝ物語であるが、英國コーヴエントリー町の領主は非常の暴君で、苛税を誅求して飽くことを知らざる爲め、百姓は塗炭の苦を嘗め、殆んど生きたる心地が無かつた。之を見るに見兼ねてゴダイヴァ夫人と云ふ女が其の良人と共に憐愍の所置を屢々領主に歎願して見たが依然として苛税誅求は改まらな。しかし遂に領主は、若しゴダイヴァ夫人にして町内を裸體のまゝで馬に跨つて乗り廻したならば、誅求を緩めてやらうと言ひ出した。ゴダイヴァ夫人は早速承知して、一日裸體になつて町内を馬で乗り廻したが、その日は町内の家々悉く門戸を閉し、一人として夫人の裸體乗馬の姿を見たものがなかつたとの事である。たゞ一人トムミーといふ悪戯男が之を覗いて見た。さうすると天罰贖面で、すぐ眼が潰れて仕舞つたと傳へられてある。娼姐にしても亦そのゴダイヴァ夫人にしても、一身を犠牲にして社會の利益幸福の爲めに盡した女は、皆斯く後世までも生きて決して死なぬのである。斯る女人には無量壽がある——限り無き生命がある。女人

も大慈大悲心さへあれば、媽姐の如く弟橋媛の如くゴダイヴァ夫人の如く、後世を驚かす勇者となり得られるものである。女人にあつて欲しいものは、實に觀世音菩薩の大慈大悲である。これさへあれば、勇氣の乏しい事などを憂ふるの要は少しも無いのである。必要な勇氣は機に臨み場合に應じて自ら生ずるものである。人の慈悲心は其儘勇氣である。女人の病所は、兎角小さな慈悲を以て自ら足れりとする所にあるものである。

無上の歡喜

一 あやしきは人心

無病第一利。知足第一富。

善友第一親。菩提第一樂。

何時も納共のお話をする肝心の事は、不動着の信念を養成する事に歸するのである。凡そ

外界の現象を眺めても、又内心の現象を顧みても、物心共に須臾も止らずして、變遷常なきが實際の有様である。詩人が之を詠じて、

惟見落紅風拂盡。不知庭樹綠蔭生。

と。詩に詠すると又其處に趣がある。昨日までは美しく咲き誇つて居つたと思ふ花が、今日は早や風に散つて何時の間にか庭一面に緑の色となり、誠に満目青々として天日を蔽ふやうに繁つて來た。是は景色の上で言うたのであるが、人間の萬事萬端、大となく小となく、決して何時でも同じ状態を保つて居るものはない。即ち時々刻々に變化しつゝあるので、外界の現象が既にさうである。是と同じく吾々が平生心と呼んで居る其心の姿も亦決していつも同じではない。自分の事を顧みても、今朝起きてから只今までの間でも、細かに考へて見ると、其間には自分の心が幾變遷して居るか分らないものである。

うつりゆく始めもはても白雲の

あやしきものは心なりけり

と歌うた人もある。大空に雲が一片浮んだと思ふと、それがズツと擴がつて一ぱいになつたが、又何か氣壓の爲かバツと晴れて跡方も無くなつて仕舞ふ、無くなつたかと思ふと又出て来る、實に變幻自在、出沒縱橫、須臾も止つて居らぬ。我々の心も丁度此れと同様である。

二 心の落着

我々の心の作用と云ひ、又外界に於ける物質界の有様と云ひ、共に同じく時々刻々に變遷して始終移り變るから、我も其に附いて廻つて、始終移り變つて行つては殆んど取留めもない事になる。そこで變遷定まりなき中に身を投じて置きながら、常に寂然不動の状態を保つての修養をしなければならぬ。我心を動かすと云ふ事は既に迷ひの初めである、故に麻糸の亂れたやうな中に在つても、常に心の止まる所を知り、心の落着き處を知らしめると云ふ事が宗教と云ふと廣いけれども、我が佛教に於ける本領である。

然るに世間には、宗教とは娑婆世界と離れて極樂往生する事、又は煩さい世間を捨て、引

込思案になる、要り厭世的に導いて行く。それが宗教であるといふ者もある。時としてはそれにも必要であらうが、我佛教の本領から云ふと、さういふ事はまだ或る種類の人に對する方便的説法に過ぎないものである。之を根本的にいふと、何んな處に持つて行つても決して我心を動かさないといふ處まで行かなければ本當ではないのである。而して其の根本に迷するには、其の入口が種々様々あつて、淨土門とか聖道門とか稱へて居る。世間でいふ所の他力自力と云ふのがそれである。其の入口は違つても約り同じ高峯の月を見るのである。

三 安心の道如何

所が吾々が平生爲て居る事は、學問をするとか、理窟を言ふとか財産を拵へるとか、地位を得ようとか、數へ立てると限りはない。けれども一言にして云へば衣食住を安樂にしたい、自分自身の安心を謀りたいと云ふ事に歸着するのである。要するに自分に一の安心を得たいと云ふ事に過ぎぬ。所が今擧げた様な事は果して眞箇の安心が得られるであらうか、勿論或

程度までの安心は得られるであらう。しかし一つ安心すると又一つ不安心が出て来る、二つ安心すると又もう一つ不安心が起つて来ると云ふ様になつて、とどのつまりは眞の安心を得る事は出来ないのである。小供は何にも知らぬから何事をも分つた様に、誠に無邪氣な顔つきをして居る。何も煩悶とか懷疑とか云ふ雲も霞も掛つては居らぬ。寔に清淨なものである。然るにそれが段々成長し智慧附いて行つて種々の事を教へられ、種々の事を知つて来ると、知つただけづゝ矢張不安心が殖え疑ひが廣くなり、煩悶が増して来るのである。「字を識るは憂患の始」と古人も云はれた位、學問とか知識とか、それも無論必要ではあるが、單にそればかりで大安心、即ち堅く信じて疑はぬといふ堅固なる境涯にはどうしても到り得ないのである。況や昨日の紅顔は忽ち變じて今日の白骨となると云ふやうに、ズン／＼移り變つて行く世相を観察するに於ては、此れで安心を得ようと云つても安心の出来る譯はないのである。心理上の作用は萬事萬端皆さういふ様な有様で、學問が出来れば出来るで又それが心配の種となり、御金が出来れば出来るで矢張それ相當の心配もするやうになる。而かも世の中の事

は、兎角當にして居つた事が先から外れ勝ちのもので、外れて行く毎に色々と疑ひも起つたり、惱みも出来たりして、心配の絶える事がない。結局は何うしても宗教的信仰の力に依つて大安心を得るに非ざれば、眞の安心なるものは決して得られぬのである。

四 トルストイの懺悔

一例を擧げて見れば、カウント、トルストイの、懺悔録の中にも、若い時分に色々の心配不安が多くてどうも成らぬから、いつそ麗はしい家庭でも作つたならば、其處に一つの安心が出来たらうと、嫁さんを迎へた。所が其の夫人と云ふのが却々優れた人で、トルストイがあれだけの仕事をするには、内助の力が餘程有つたらしく、又御承知の通り大分良い子供も出来ました。其度にトルストイに於ては、その一つ／＼の安心は次第々々に出来て来たであらうけれども、肝心の自分の心の眞の安心と云ふ事は出来ない、是は何うしても自分自身で大満足の境涯を見出さなければならぬと悟つて、本當に宗教界に入り込んだと云ふやうに

書いてある。

之を惟ふに總ての人が皆さうであらう、いづれも天下泰平らしい顔色をして居るのが人間
の常であるけれども、一度其内容へ入つて見ると、種々様々の煩悶懊惱があり、何方かと云
ふと朝から晩まで額に汗して纒に其日々々の煙を揚げてゐるやうな人よりも、世間から彼の
人は誠に樂な身分と美まらるゝやうな人が、却つて心の中の心配が餘計多いと云ふ譯、實に
能くしたもので天道は公平無私である。誰一人にも身體の上でも心の上でも十分の自由を與
へて居ない代りに、一般に又若干の自由を與へて居る。けれども世間の人は慾に蔽はれて居
る爲め、決してそれで満足しない。其の結果遂に本當の宗教心を自覺して來るやうになるの
である。彼の英國のグラッドストーン、有名なる天下の大政治家、あの人が或時斯様な事を言
うた事がある「私は何でも捨てる」——成程妻とか子とかいふものは捨て難い、それから地
位とか財産とか、色々の我が所有のものなどは捨て難い。併し絶對絶命捨てねばならぬと云
ふ時には、否でも矢張り捨て、仕舞はなければならぬ。現に今現世から暇をして冥途へ旅

立つといふ時には、否でも皆棄てゝ行かなければならぬ、それで「我は總てを棄てるけれど
も唯此の宗教、是丈は決して棄てる事は出来ない」と言つて居る。

五 英傑の心地

日本に於ても、例へば戦國時代の英雄とか豪傑とか言はれた人達でも左様である。戦國時
代ばかりでは無いけれども、今一寸心に浮んだが、甲斐の信玄といふ人も彼の時代の英雄、
自ら不動明王の再来であると信じて仕事をした。成程其處に立つてやれば、千軍萬馬の中
に在つても随分樂に仕事が出来ようと思ふ。故に謙信、信玄の相接して戦ふ様子は、殆んど禪
宗の問答商量的に出来て居る。川中島の時であつたか互に其馬首を接する迄行つた。其時
「如何なるか是れ劍上の事」謙信がスツと太刀を振擧げて斯く言ふと「紅爐上一點の雪」と
答へて、信玄が持つて居る軍配で受けたと云ふやうな工合。一面から言ふと甚だ呑氣だが、
人間には如何なる場合でも泰然自若として、綽々たる餘裕が無ければならぬ。其の餘裕は決

して一夜作りで出来るものではない。平生養ひ得たる所の寂然不動の一大安心があればこそ、始めて知らず覺えざる間にかういふ餘裕ある働きが出来るのである。最大の安心、無上の歡喜、如何にして能く自己に領得が出来るか、之はよく靜かに思慮せねばならぬ大問題であらうと信ずるのである。

六 楠公決死の前日

又彼の家康公などでも、實に血腥い中に身を置きながら、南無阿彌陀佛の名號を始終戰の中唱へて、一日に六萬遍の名號を唱へられたと云はれて居る。楠正成公は神戸の廣嚴寺の明極俊禪師の書いた碑文などを調べて見ると、其の裏面には立派に安心の出來て居る事が明かに記してある。詳しい事實は又他日に述べる事として、楠公が湊川に於て戦死をせらるゝ前に、彼の明極禪師を廣嚴寺に訪ひ参じ「生死交謝の時如何」今大事を決せなければならぬ、此の生死の境が到來した時は如何、斯う尋ねられたれば、禪師は即座に「兩頭共に截斷して

一劍天に倚つて寒し」と云ふやうな痛快な問答がある。又明極俊禪師に参ぜられた其の以前に方つて、妙心寺の開山關山國師が奈良の道中をして居る時分に、楠公は禪師に出會うて、既に此意を決着せられたと云ふ事である。かういふ實例は擧げれば澤山あるが、いづれも他日の商量に俟つこととせう。

七 眞の安心

斯様な譯であつて、本當の安心を得ようと云ふには、宗教的安心が必要である。宗教的の安心と、世間的日常の安心とは違つて居るかと思ふに、實は格別の違ひはない。世間的安心も其の方法を能くすれば、皆一つ／＼安心は出來て行きませう。けれども世間的の安心で、従つて安心の裏には不安心が伴ひ、樂みの裏には直ちに苦みが伴ふものである。本當の安心即ち寂然不動の大安心はかゝる相對的世間的では逆も得られないので、現在及び將來に亘つて動かない所の大安心人間同志の安心ばかりで無く、人と佛と直ちに接觸すると云ふやうな

其の安心はどうしても宗教的安心の根柢が無くては得られない。

要するに我々が朝から晩までウロ／＼として、頻りに何物かを追ひ廻つて居るのは、其の仕事は銘々違ふけれども、總て安心を得ようと云ふに外ならぬ。併し前にも述べた通り、世間的の安心は、或る程度まで達すると又不安心を喚起するのである。どうしても一の精神的眼を開き、精神的一の光を見出さなくては眞の安心は得らるゝものではない。

八 盲目同志の出会い

或る一人の盲目が、夜分出掛ける時に必ず提灯を持って出掛ける。或人が「提灯を持って夜歩きをするのは可笑しい、持つて居つても居らぬでも矢張目は見えぬから、それは餘計な事ぢやないか」と言つたら。其の座頭が答へた「御尤もですが、實は私が闇がりを通つて居つても、人は目くらか目明きか一向見堺なしに動もすると暗中に衝突を來す事があつて危い、自分自身は要らないけれども、私が提灯さへ持つて居れば、人が氣を付けて皆路を避けて呉

れるので提灯を持つて歩く」成程好い事を考へた、それは尤もだ。所が此事を聞いた他の一人の盲目が同じく夜出る時には之を眞似て必ず何時でも提灯を持つて是なら安心だと歩いて居つた。所が或時先の目くらと後の目くらとが同じ路で出會して、遂に打付かつた、先目の目くらが非常に怒つて「此の通り提灯を持つて居るに、それに衝突ると云ふ迂濶な人間は何者であるか」と云ふて提灯を差出したらば、又向ふでも「お前提灯を持つて居ると云ふが私も此通り」と差出して「此の提灯が見えぬのか、目くら同様の目明め」と云うて互に掴み合ひを始めた。其處へ不圖連り合はした人が之を見て「實はお前も目くら、お前も目くら、盲人同士だから分らぬ筈ぢやが、提灯の中の火は、どちらも疾に消えて居ります、お互に料簡違ひしたのだから仲直りをしたら宜からう」「さうか、向ふから來たのも目くらぢやつたのか」と互ひに一笑の間に別れたといふ話がある。

九 一隻眼を開け

是は一寸可笑しいおどけたやうな話ではあるけれども、或る何物か此の喉の中に含まれてをる様である。世間には實際眼の明いて居る盲人が澤山ある。丁度目くらが夜分提灯を差出したやうに、學問といふ提灯もあれば、知識と云ふ提灯もある。或は金ある者は金、書物ある者は書物、地位ある者は地位、何でも人に知らしめよう、これさへあれば何處へでも行ける。決して衝突は無からう、是れで自分も安心だと思つて居るが、さて實地に當つて見ると、却々甘く行かない。それは何かと云ふと、是は全く人生の眞意義とでも云ふべき其奥を未だ極めて居らない爲である。人生の眞意義を知るには先づ自分の身を知らねばならぬ。自分の身を知るには初めに申した自分の心と云ふものを調べて、而して其心の眼を開かねばならぬ。何を手に持つて居つた所が、自分の本當の眼、即ち心の眼が開けぬ以上には、盲人の提灯と同様で何の役にも立たぬのである。そこで眼を開くと云ふは自力的の言葉であつて、禪宗で言ふ悟を開くと云ふやうな事になる。大悟徹底、即ち大安心をすると云ふ事になるのである。眼さへ開いたならば無論確かに大安心する事が出来るのであるが、人に依つては我

は其の機根が無い、我は自力的の宗教は好まない、矢張他力的の神なり佛なり其の慈悲に縋つて手を引張られて行きたいと云ふならそれでも宜しいが、實は吾々の宗門の立場から言ふと、我は神の片身である、我は佛の顯れである。我自身が元來其處から出立して來て居る。我自身が其處から生れて來て居るのであるから、其本へ立戻りさへすればよいのである。然るに多くの人は種々の迷ひの爲めに遂に彷徨ひ出して、落ぶれて仕舞つたのである。即ち自分の確乎たる立場が無い爲め、色々の外物に迷はされて、變遷常なき境遇に陥つてしまつて、恰かも流れ川の上に椽の實の殻が一つ浮いて、それがズン／＼當て處も無く下へ／＼と流れて行き居ると同様に成つて居る。随つて生死の大海の中に頭出頭没して其の歸止する所を知らない有様である。

一〇 宗教的情操

斯る境遇より救ひ上げるには、先づ宗教的信仰と云ふものを涵養し確立しなければならぬ。

子供などが或る年齢に達すると、必ず宗教的情操が自然々々に發露して来る。所が今までの教育と云ふ者は、それを悉く抑へてしまふ、丁度春になつて木の芽が吹いて居るものを、爪の先で千切つて仕舞ふ様な教育の遣り方、さういふ教育の仕方と云ふものは、幼少の時代には分らないが、段々成長して社會に出て後、殊に一家を成して後、大變な悪影響を來して居る。今の社會は知識萬能と云ふ事に安んじて居るが、其の知識に伴ふ道徳又は宗教といふ根本的のものが無ければ、其の知識は多くの場合に於て寧ろ害用せられ易い。金錢と云ふものも、之に伴ふ堅固なる根本的の信念が無いと、兎角悪い方には使はれ易いものである。人間は何うしても子供の時代、悪い色の着かない純白の時代からして、其の兒童の自然に持つて居る宗教的情操を涵養させる様に導いて行かなければ駄目であると思ふ。殊に家庭に於ける宗教心の涵養といふものは、婦人方と最も密接なる關係のある事は申す迄もない。其の一家の主婦たる人に宗教心の有るのと無いのとで、其の子弟に及ぼす感化といふものは非常の相違があると考へる。さうして主となる人に宗教心の無い家庭と云ふものは、實に秋風蕭索と

して滿地の枯葉を吹くが如く、殺風景極まつた有様であるが、それが縱令迷信であらうとも何等か宗教のある家庭に至ると自然に春風胎蕩といふ感じが浮んで来る。そこには同情の心が動いて居り、博愛的の心が何となく其處に充滿して居るからであらうと思ふ。

一一 迦旃延尊者

最初に擧げ示した所の語に就いて、一つの話が經文に附けてある。佛様の御弟子の迦旃延尊者が富める人の前も、賤しき人の前も、善き縁を結んでやらうとして托鉢の歸り路に、或る一つの寂しい流れの處に出て來ると、其處に一人の老婆が大變心配らしい顔をして河の邊に立つて居るから、尊者が「見れば大層心配らしい様子だが何うした」と尋ねられた「實は私は今まで多年の間、或貴族の處に雇はれて居つた者であります、然るに一朝或る過ちに依つて其の家長の憤に觸れて、遂に今日只今出て行けと云ふ事で、餘儀なく出て參りましたが、さて明日からは食ふに食なく、住むに家なく、どうして暮さうか當もなく、唯生涯使うてや

ると云ふ事で、十年も二十年も使はれて居つたのが、一朝にして斯う云ふ憐れな事になつた。いつそ生恥曝すよりは、此の川へ飛込んで死なうと思つて此處まで参りは致しましたが、又思ひ返して見ると、そこは弱い人間の事、死ぬと決心は付けたものゝ、何となく後へ心を引きかれるやうで、何かそこに未練が残る」かういふ話をした。

そこで迦旃延尊者も大いに同情されて「それは如何にも氣の毒な事だ、然し私は佛弟子である、佛弟子は一紙半錢も身に蓄へない制度であるから、今物質的にお前を何うしてやらうと云ふ事は出来ぬが、幸ひ平生我々が佛より承つて居る有難い事があるからして、之を切めてもの慰め、心の慰安として投げてやらう」と云はれたのが前申した四句の偈であります。「無病第一の利なり」世の中には衣食住何不自由なく暮して居る人があるが若し朝から晩まで病氣ばかりして、年が年中醫者と藥に親んで居るやうな人も澤山ある。それに比べて見ればお前は幸ひ年はとつてゐても、體は強壯ではないか、其體さへあればどんな樹の下石の上にも臥るとも、我に安心さへ出来て居ればそれが宜からうと、かういふ工合に慰められた。

それから「知足第一の富なり」どんな貴族でも富豪でも、身は如何に衣食住に充分の樂みをして居つても、若し満足の心が無かつたならば、始終是でも不足あれでも不足、生涯不足不満で死んでしまはなければならぬ。若し我分に安んじ足る事を知るといふ麗はしい心があるならば、それは第一の富ではないか、實に有難い富である。第三に「善友第一の親なり」善き友達は第一の親みである。成程ただ親戚故舊といふと、それは肉體上の關係や、其の家家の關係で出来上つたものであるけれども、時あつては甚だ頼みにならぬ事がある、親子同志でも喧嘩をする、夫婦同士でも別れて仕舞ふ事がある。種々の事があるけれども、心と心と知り合つた其の善き友達、善き事を教へて呉れる所の友達といふものは、第一の親類親戚である。親子も善ならぬ親みある者である。お前が若し誰一人頼る者が無いと云ふなら我に頼れと佛は吾々に教へられてある。年老いたる男を見ては汝が父の様に思へ、年老いたる女を見ては母の様に思へよと、かう我々は教へられた、お前が其の積りなら我はお前の子の積りで居る、お前は我を子と思へよと慰められた。

さうして第四には「菩提第一の樂なり」菩提といふは原語であつて、即ちサンスクリットでは(Bobhi)と云ふ、道といふ事になるのであるが、此道を樂むといふ樂みは盡くる事の無い樂みである、世の中の樂みは必ず半面には苦みが伴うて居るけれども、道を樂しむといふ宗教的の清らかな心の有様を樂しむと云ふならば、是は最上の樂みではなからうかと、斯う云ふ工合に親切に説いて聞かせたのであつた。今私は一飯のお前に施してやるべきものは手に無いけれども、此の四句の偈を教へてやるから、是れで喜んで満足せよと云つたら、其の婆さんが生れ替つたやうな限りなき歡喜を得て、生涯その麗はしき心を以て、——心に満足があるから、何ういふ處に居つても不平を訟へずして——身を全うしたと云ふ事が詳しく書いてある。依つて吾々は常に勤めて世間的相對的の安心より、更に進んで此の宗教的の大安心を得て、盡くる事なき樂みと際りなき歡喜とを得られん事を希望するのである。

臨機應變終

□ 製 複 許 不 □

昭和十年一月二十日印刷
昭和十年二月八日發行

臨機應變

著者 釋宗演

發行者 神谷勵
東京市神田區須田町一丁目四番地

發行者 神谷泰治
東京市神田區淡路町二丁目十一番地



發兌所

趣味の教育普及會

東京市神田區淡路町二丁目十一番地
電話 神田四一四九番
郵政東京一六三九二番

【定價金壹圓八拾錢】

東京市神田區須田町一丁目四番地
★行印所刷印館宮神★

○發兌圖書目錄○

荒木貞夫著 非常時教本 定價〇、五〇	上田 保著 趣味の法律 特價二、八〇	上田 保著 趣味の法律續篇 特價二、八〇	安元貫祐著 趣味の易學 特價二、八〇	幸田露伴著 洗心錄 特價二、〇〇	大町桂月著 模範作文講義及文範 特價一、六〇	笹子修三著 世に立つ道 特價一、八〇	市川一郎著 西洋倫理學史 特價二、〇〇	笹子修三著 風雲時代 特價一、八〇	木暮浪夫譯 基督教の本質 特價二、〇〇	笹子修三著 趣味の世界歴史 特價二、八〇	哲學研究會 哲學辭典 特價二、四〇	トロイ原著 哲人の森林生活 定價一、五〇	内藤午朗著 近代詩辭典 定價〇、八〇	鮎山篤次郎著 短歌新辭典 定價〇、八〇	内藤午朗著 童話新辭典 定價〇、八〇
--------------------	--------------------	----------------------	--------------------	------------------	------------------------	--------------------	---------------------	-------------------	---------------------	----------------------	-------------------	----------------------	--------------------	---------------------	--------------------

◆每月刊行圖書目錄、御申込次第進呈す

325
486

終

